

1 小国 514

文部省

町のアルバム

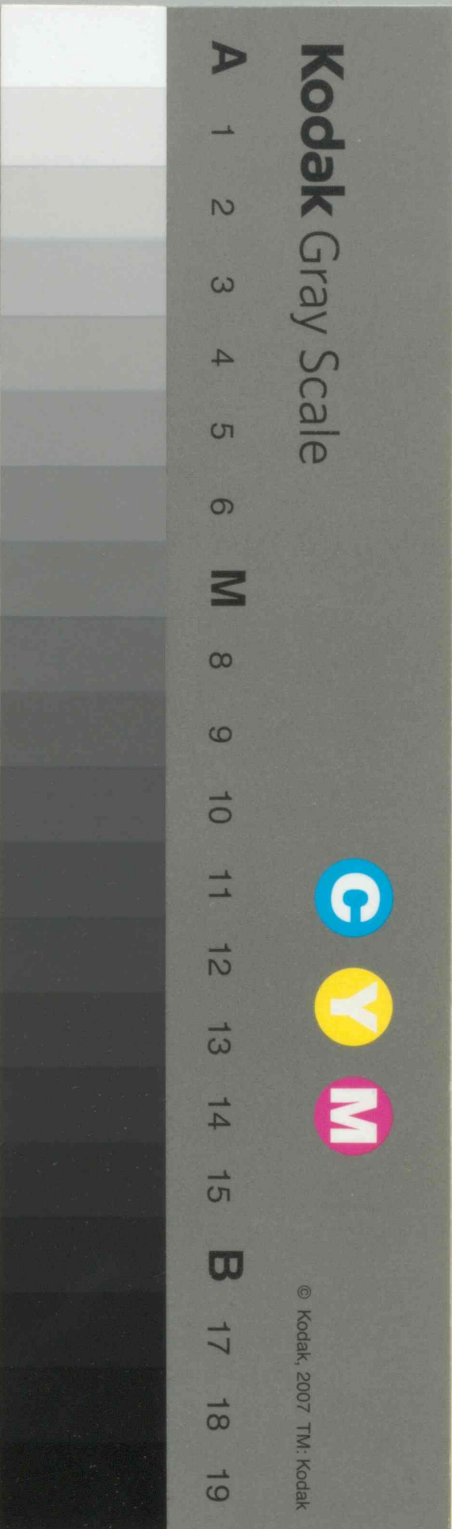
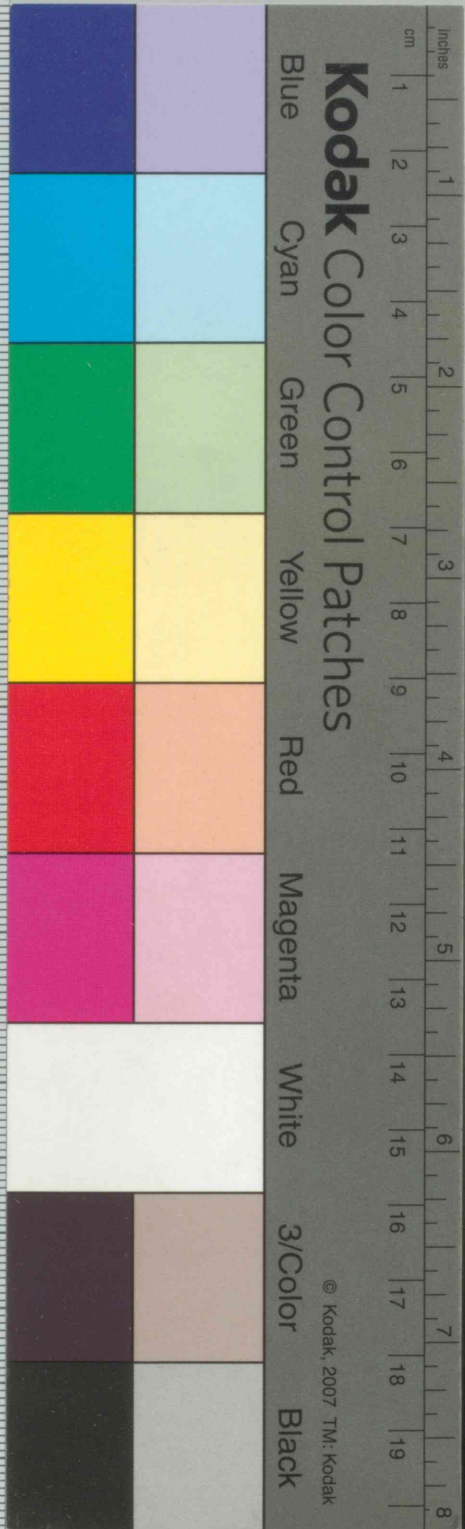
3759
Ni16
資料室



冠
茶

本 国 語 の 本
日本書籍国語編修委員会

5年下



60403

教科書文庫

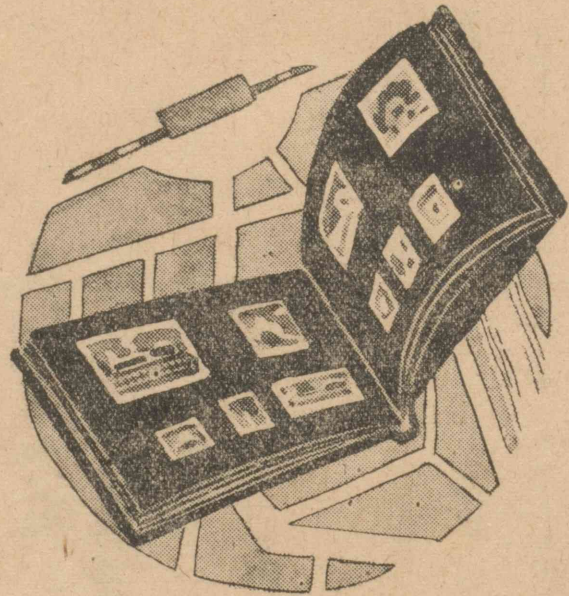
6
810
44-1949
20000 21563



© Kodak, 2007 TM: Kodak

昭和24年10月10日
文部省検定済
小学校国語科用

町のアルバム



5年下

資料室

375.9
N116

広島大学
図書印



9 町のアルバム

- 一 ぼくのアルバム……………4
- 二 町の音……………7
- 三 秋草の花……………9

10 青ぎり温泉

- 一 小さなオルガン……………11
- 二 焼けたカラシ……………13
- 三 新一と五人の子ども……………14
- 四 きれいな貝がら……………17
- 五 子どものからだ……………20

11 平和工場

- 六 青くすんだ湯……………24
- 一 いとこの運転手……………27
- 二 へたな字……………32
- 三 土曜日の夜……………36
- 四 パスツールの映画……………39
- 五 平和を荷なう……………48

12 りんご病院

- 一 キュリー先生……………53
- 二 四はこのりんご……………56

三 院長先生の話……………62

13 りんご園の日記と冬の歌

- 一 りんご園の日記……………66
- 二 冬の歌……………76

14 村のアルバム

- 一 道具さえあれば……………78
- 二 手製のスキー……………83
- 三 雪のすばこ……………88
- 四 先生の手紙……………94

15 劇

- うぐいす……………99

16 問題

- 一 名前と説明……………(8)
- 二 音のよびかけ……………(8)
- 三 唱歌とろう読……………(9)
- 四 たとえ……………(10)
- 五 すじ書き……………(10)
- 六 形の変る言葉……………(11)
- 七 短歌(和歌)……………(13)
- 八 形の変らない言葉……………(14)
- 九 「た」……………(17)
- 一〇 「う」「ます」その他……………(18)

町のアльバム

一 ぼくのアльバム

ぼくのアльバムの

いちばん初めに、赤ん坊の写真がある。

とんがった頭、今にもなきそうな顔

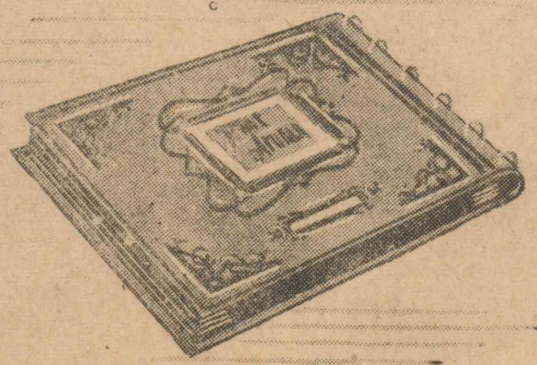
赤ん坊上原ひろし。

ぼくは、これを見るたびに、変な気持になる。

むくむくしたその顔が、

ぼくのだと思ふと、ふしきになる。

その次に、



廣島大學
圖書印

ぼくは、おかあさんにだかれてる。

その目は、少し上の方を向き、

その顔は、何かを見てわらっている。

うしろには、コスモスの花が、

おかあさんよりも高く、真白にさいている。

この写真を見ると、ぼくは楽しい。

はらがけ一つのはだかで、

すな山を作っている。

四つの時の、上原ひろし。

ぼくは、この時のことを覚えてる。

おとなの人たちが、ほめてくれたのに、



ぼくは、自分の思う通りにできないので、
すな山をこわしてしまつたのだ。

アルバムをさらにめくれば、
なつかしい町のすがた。

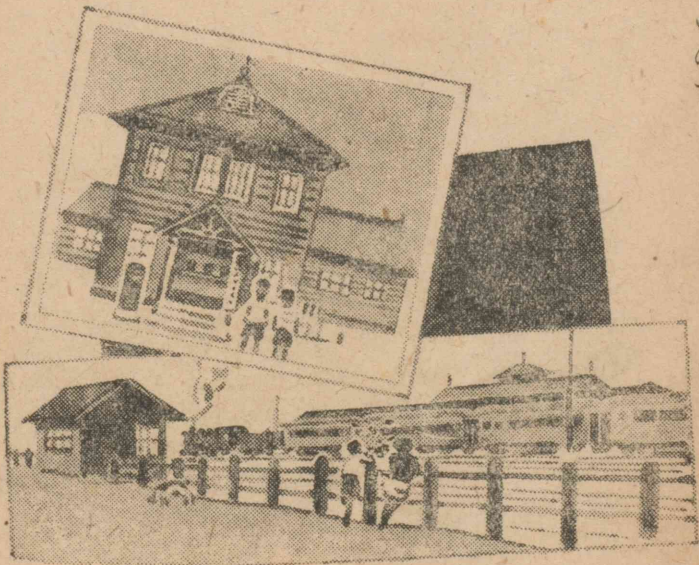
学校も、お店も、郵便局も、
工場も、病院も、停車場も――

そこの物音や、人々の顔

かんぱんや、なみ木のかげを

ぼくは、今でも、思い出すのだ。

黒いラシヤ紙で作つた、



ぼくの小さいアルバム。

その中には、いつもぼくがいる。

ぼくの通つてきた世界がある。

それを見ていくうちに、

ぼくの心は、豊かにふくらんでくる。

うしおのように、ときめいてくる。

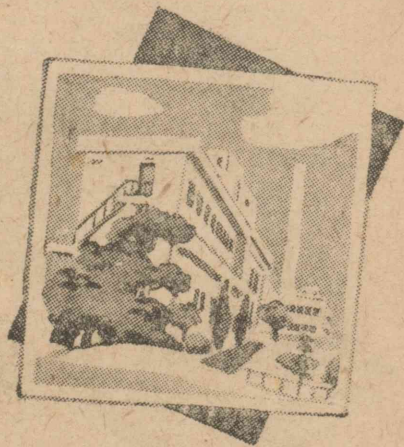
二町の音

おかの上から見れば、

町の屋根は、かすんでいる。

白い秋の雲がすぎると、

そこには、かげが流れる。



静かに聞えてくる、

町の物音——

子どもらの、喜びの声、

自転車の音、自動車の音。

工場の音、サイレンの音。

さまざまの音は、一つになり、

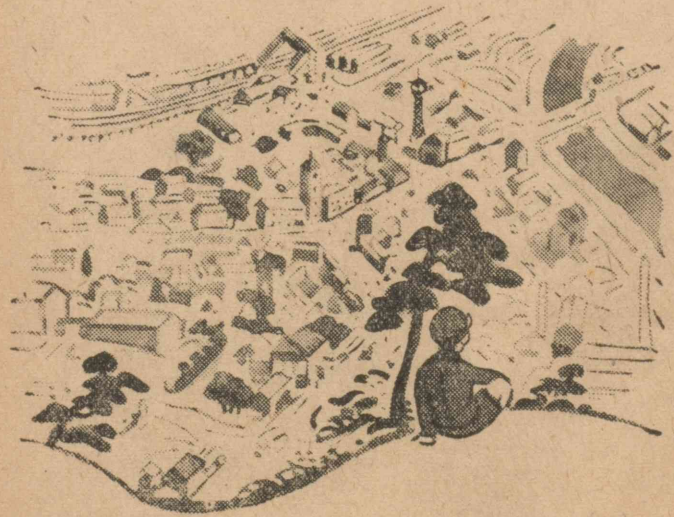
おかの上に、のぼってくる。

生き生きしたいとなみの中から、

今、生れてくる、町の物音——

ぼくは、おかの上から、

しみじみと、それを聞いている。



三 秋草の花

この道の 秋草の花

日のくれの うすいむらさき。

病院の門まで つづく、

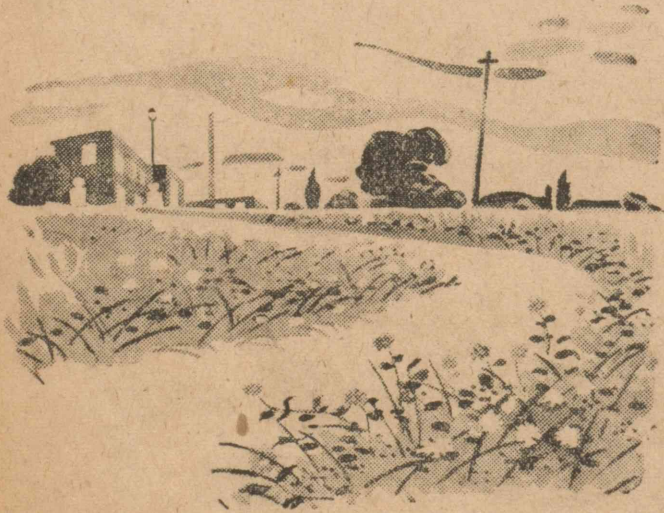
この道の 秋草の花。

病院のまどは とざして、

はなやかに ともる電燈。

かけ近く うつるを見れば、

人は居て、楽しく語る。



病院の門を はなれて、
またつづく 秋草の花。
やすらかな ねむりの前の、
この道の 秋草の花。



青ぎり温泉

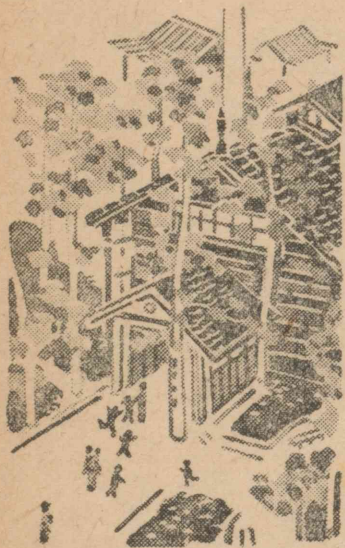
上原ひろしのアルバムの中、ちょうど、真中あたりに、青
ぎりの林の写真がある。よく見ると、その青ぎりに囲ま
れて、一けんの家がある。えんとつを立てたこの家は、
ひろしの友たち——新一や、いさむや、その他の町の子
どもたちの、楽しい遊び場だった。

一 小さなオルガン

その町は、ちょうど、おかの町になっていて、青ぎりが、いちめん、
植わっていました。青ぎり温泉は、その青ぎりの林に囲まれてありまし
た。げんかんわきの、古い木の幹に、「ラジウム湯・青ぎり温泉」と、緑
色の絵具で、ほりつけてありましたが、まことに、すつきりとした感じ

で、広い葉の間にさいいた、黄白色の
ふさ花との照りはえも、ほんとうに
みごとでした。

と言っても、町の中の ラジウム
温泉です。えんとつもあるわけで、
風のない日など、えんとつから出る



けむりが、青ぎりの林から、まっすぐに天にのぼる有様は、となりの町からも、それとわかりました。それで、わざわざ電車に乗って、この青ぎり温泉へやってくる人も、たくさんありました。

子どもたちは、また、どこの町湯よりも広くて湯ぶねのきれいな、このラジウム湯がすきでした。

青ぎり温泉の主人の、庄造しやうぞうさんは、ひとりぼっちで、だからでしょうが、子どもが大すきだったのです。

庄造さんは、ある日、小さなオルガンを買ってきて、青ぎりの林に向かったろうかに、すえました。すると、子どもたちは、

「わあっ。」

と、喜びの声をあげて、さっそく、

「土手のすかんぼ、ジャワざらさ……」

と、ひき始めました。いさむ君が、鼻を空に向けて歌いましたが、みんなは、まるで、すかんぼのように、しずくにぬれて、光っていました。

二 焼けたカラシ

けれども、この楽しい青ぎり温泉も、それからまもなく、大火事があった。かげも形もなく、焼けてしまいました。

ある日、子どもたちが、青ぎり温泉の焼け

あとを通りかかったとき、いさむ君が、

「おい、カラシが、落ちてたぞ。」

と、焼けたれんがの下から、焼けさびたカラシを拾い上げました。みんなは、たちまち、その焼けさびたカラシをとりまいて、なつか



しそりに、ながめました。

「ぼくに、ちよつと、さわらしてくれよ。」

「ぼくにも。」

「ぼくにも。」

カランは、リレーのように、手から手へまわって、中には、ちよつとおさえるまねをするのもしました。

とたんに、みんなには、湯ぶねからあふれ出る、清い湯の有様が思い出されて、なつかしさは、また、ひとしおでありました。

三 新一と五人の子ども

ひとりぼっちの庄造さんは、青ぎり温泉がなくなってしまうと、もう二度と、青ぎり温泉を、建てることはできないと思つて、ほんとうに、

がっかりしたのでした。

庄造さんは、友だちが、海岸で、漁をしているのを思いつくと、そつだ、ひとつ海へへ行つて、強いしお風に当つて、あみ引きの手伝いでもしよう。そつすれば、きつと、生きる道が開けるかも知れない。そつだ、そつしよう。そつ決心すると、ある月の黄いろい夜、おかの町を去つたのでした。

ところが、このおかの町に、ある日、みょうな立てふだが出ました。立てふだといつても、焼けトタンに新聞紙を張りつけ、くぎの折れたよな字を、すみで書いたもので、「青ぎり温泉を建てることについて」といふ見出しで、読んでみると、次の通りです。

ここは、もと、青ぎり温泉のあつたところだ。みんなは、ここで、すつぽりと湯につかつて、気持のよい日を、送りました。よごれたからだも、きれいなになりました。

その青ぎり温泉を、もう一度、ここに建てたいと思います。けれども、青ぎり温泉の主人の庄造さんは、居なくなりしました。私たちの力で建てたいと思いますが、どうしたらよいでしょう。賛成の方は、よいちえを、貸してください。

新一と、五人の子ども

このおかの町は、本通りから、少しはなれてるので、余り通る人は居ませんでした。でも、このおかをぬけると近道であることを、知っている人とか、この近くの町の人たちは、時々、ここを横ぎりました。

すると、この立てふだです。

「みよんな立てふだだな。」

人たちは、不思議そうにながめました。読んでしまうと、

「これが青ぎり温泉のあとか。」

と、今さらのように、あたりを、見わたしました。

中でも、庄造さんを知っているような人は、庄造さんが居ないことがわかると、なんともいえない、考かんえこんだ顔になるのでした。

四 きれいな貝がら

けれども、この立てふだも、だれひとり、新一君たちに、いい考えを持ってきてくれる人もないままに、一日一日、あせていきました。新一君たちにも、もうどうしていいか、これ以上のちえもうかびません。

新一君の家は、おかの町でも、青ぎり温泉から少し下ったところの、すし屋さんでした。ここからは、おかの町がひと目に見え、月の夜など、かげ絵のようです。

きょうもまた、星月夜です。新一君が、まどを開いて、ぼんやりと夜空をながめていましたら、

「新一君のおうちは、ここですか。」

焼けトタンの向こうから、声をかけた人がありました。

「はい、そうです。」

新一君が、答えますと、

「ちよつと、青ぎり温泉について、ご相談したいと思ひましてね。」

その人は、そう言つて、

「実は、あの青ぎり温泉は、ひとつ、私が、建てたいと思ひますが。」

と、言つたのです。

「ほんとうですか。」

新一君は、とびつくように言いました。

でも、言つてから、新一君は、

なんだかきみ悪くなりました。ハンチングをかぶつて顔はよくわかりませんし、今ごろ、トランクをさげて、おかの町を、歩いているなんて、——ぎくりとしましたら、その人は、新一君の心を見ぬいたように、言いました。



「新一さん、ご心配は、いりませんよ。」

そして、

「こんばんは、もうおそいから、あしたの朝早く、もう一度参りましよう。これは、おみやげです。」

と、一つのふくろを新一君にわたして、立ち去ったのです。

新一君は、きつねにつままれたようです。しばらく、うしろすがたを見ていましたが、今度は、みようにきみ悪くなりました。

気づいて、ふくろを開いてみますと、中には、きれいな貝がらが、いっぱいつまっていました。ざらざらと、ひろげてみますと、月の明かりに、金く、ほう石のようでした。

五 子どものからだ

新一君が、その夜、青ぎり温泉のゆめで目がさめますと、昨夜のその人は、もう、まどの外に立っていました。

「おはよう、新一さん。」

でも、新一君は、これも、ゆめではないかと、おどろきました。それは、青ぎり温泉の主人の、庄造さんだったのです。

「庄造さんだ。庄造さんだ。」

まもなく、ようすを知って、いさむ君たちもかけつけました。

みんなは、それから、庄造さんを囲んで、青ぎり温泉の焼けあとにあらがりました。

もう立てふだの字は、読めないのもありましたが、庄造さんは、もう一度ゆつくりと、それらの字を拾い読みすると、なみだぐんて、「ありがとう。」

と言いました。庄造さんの心は、今、ほんとうに、清い子どもたちの心に、うちふるえていたのです。

こんなに、子どもたちの、あこがれている青ぎり温泉を、どうして建てないでおかれようか。庄造さんは、もう、子どもたちのためにだけでも、青ぎり温泉を建てなければと思いました。

そうですね。庄造さんは、あれから、おかの町を下って、海岸の友だちのところへ、漁の手伝いをしていたのです。が、どうしたのでしょうか、庄造さんには、あの青い海の水が、青ぎり温泉の、清らかな湯水に見えてくるのです。きれいな貝がらのはまは、流し場です。

庄造さんは、もう、じつとしていられませんでした。

それに、町では、あんなにお湯のすきだった子どもたちも、きっとこまづっているにちがいない、その子どもや、町の人たちの、からだや心を

さわやかにするのが、ほんとうの自分の役ではないだろうか。――

青ぎり温泉を、もう一度建てよう。

庄造さんは、こうして、また、おかの町へ帰ってきたのでした。

すると、町へ着いたその夜、焼けあとの、月明かりの中で、まず目についたのは、子どもらしい字の、あの立てふだです。

ここは、もと、青ぎり温泉の、あつたところです。

読んでいくうちに、庄造さんの目は、うるんできました。そして、おかをかけおけると、新一君の家を、あたふたとおどずれたのでした。

六 青くすんだ湯

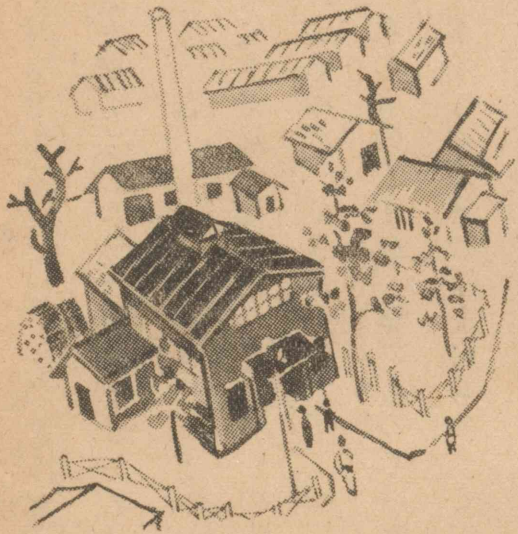
やがて、おかの町は、焼けあとが、すっかりかたづけられて、家も建ちならび、きれいな花園もできました。すし屋の新一君のところでは、ところてん、みつ豆のかんぱんがかかって、町は、やわらかく息づいてきました。

でも、それらの中で、最も人々の心をさやけくしているのは、なんといつても、青ぎり温泉であります。前の半分にも足りない、小さなものでしたが、屋根は緑色で、湯ぶねは、十人もしればいっぱいにはなつても、湯はいつもすみきっていて、流し場は、貝がらをはめこんで、はまもようそっくりです。

もう青ぎりさえ植わつた、明るい庭の入口には、「ラジウム湯・青ぎり温泉」と、緑の絵具もすつきりとほりつけて、この上もなく、みんなを喜ばせていました。

しかも、青空を走る白雲は、びっくりするほどあざやかで、その空にのぼるえんとつのけむりは、屋なみのない今の町では、どんな遠い所からでも、それと、ながめられました。「おや、青ぎり温泉じゃないかね。」と、人々は、ゆめ見るように言いました。

そして、
「そうだ。あのお湯で、久しぶりに流してくるかな——」。



と言って、おかの町へやってくるのでした。

すると、そこには、次のような立てふだが立っているではありませんか。みんなは、もう湯につかったような気持にさえなるのでした。

この青ぎり温泉は、このおかの町の、新一君ほか五人の子どもたちのよい心で、できたものです。

私のものですが、私のものではありません。

青くすんだ湯は、これらの、このおかの町の子どもたちが、清い心を注いでくれたものです。

みなさん、どうぞ、えんりよなくおはいろいろください。

青ぎり温泉の主人 庄造

11 平和工場

ひろしのアルバムをくっていくと、「青ぎり温泉」から少し先に、「平和工場」と、大きな字で書いたふたのさがっている、工場の門の写真がある。この写真を見ると、ひろしは、町にいたころ、なかよしたった木村六郎の顔を思い出さずにはいられない。

一 いとこの運転手

六郎は、今度の家へ引っこしてから、時々、もと通っていた、山の手の学校の方へ遊びに行った。そこまでは、私設の電車に約二十分、国鉄電車に約二十分、都電に約十分ほど乗る。電車は、私鉄も、国電も、都電も実によくこんでいる。

その六郎が、ある日、運転手台の近くへ乗った。

その日は、雨がふっていたためか、六郎が乗ったときは、がらがらにすいていた。電車のいちばん前の所から、ぐんぐん後へ走っていくけしきを見るのは、気持がいいものだ。そこで、六郎は、いちばん前の、ガラスまどの所へ行つた。ガラスまどには、雨のしずくが流れて、外のけしきはよく見えなかつた。六郎は、そこに顔をくつつけて、しばらく外を見ていた。

三つばかり駅を過ぎた時だつた。運転手台のしきりのまどが、ガタンとあいたので、六郎は、そつちを見た。そこには、運転手の横顔が見えた。

「あ、とおるさん。」

と、思わずさげんで、六郎は、しきりのまどから、運転手台へ首を出した。いとこのとおるが、そこにいて、運転をしているのだ。

「とおるさん、とおるさん。」

六郎がそうよびかけたが、とおるは、知らん顔をして、じつと前の方を見ている。六郎は、聞えないのかと思つて、少し大きな声を出した。

「とおるさん、こんにちは。」

すると、とおるは、やはり前を向いたままで、

「張りふだにご注意。」

と言つた。

そうだ。張りふだには、

「運転中は、決して、運転手に話しかけないでください。」
と書いてある。

そこで、六郎は、にこにこしながら、しばらく、とおるの運転手ぶり

を見ていた。

「終点へ着くと、六郎は、すぐにプラットホームへとび出した。」

「六ちゃん、大きくなったなあ。」

とおるは、六郎の両方のかたをぐつとつかまえて、言った。

「また、山の手の学校へ行ってるのかい。」

「いいえ、もう新しい学校へあがりました。」

「でも、時々、この電車には乗るんだね。」

「ええ、時々。とおるさんが運転手やってるなんて、ぼく、知らなかったなあ。」

「はははは。ちよつとおどろいたろう。」

とおるは、ゆかいそうにわらった。

「ラグビーの選手が、運転手になったわけさ。」

とおるは、去年の春、大学を卒業するまで、ずつとラグビーの選手をやっていたし、六郎もそれをよく知っていたから、こう言ったのである。六郎は、とおるの出る試合を、よく見に行つたものだった。

乗務員のひかえ室の前まで来ると、とおるは、
「おじさんもお元気だらうね。いそがしいもんだから、すつかりごぶさたしちゃってるが、元気で運転手やってるからつて、お伝えしといてくれたまえ。もう少し寒くなったら、ぼくたち卒業生の試合が始まるから、また、六ちゃんにも応えんに来てもらおう。たのむよ。」



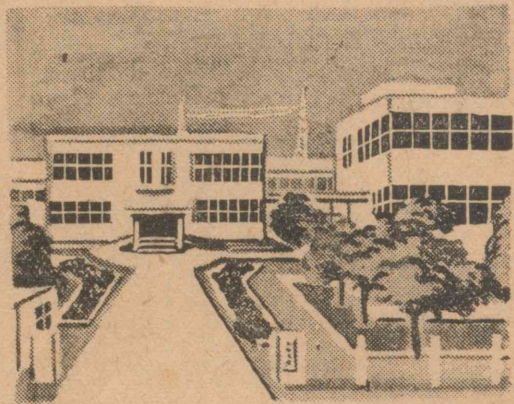
そう言つて、また、ぐつと六郎のかたをつかんで、二、三度ゆすぶつた。

二へたな字

一メートルぐらいの低いかきねにそつて、ひまわりが、ずっと続いてゐる。もう、いっぱい黒い種を持った、ひまわりである。三十メートルほど先で、そのひまわりの列が切れたところに、門がある。白くぬつたはしらに、大きな字で「平和工場」と書いた木のふだがかかつてゐる。

六郎は、そのふだの字を見るたびに、ずいぶんへたな字だと思つた。

平和工場は、りっぱな工場である。かきねが低いから、中がすつかり見える。正面に、大きなガラスまどのはいつた、木造の建物がある。その入口までは、コンクリートの道があつて、両側は、花だんになつてい



る。その建物の右に、二階建ての、六郎が今度あがつた学校ぐらいの大きさの、建物が立っている。この建物と建物の間にも、コンクリートの道が通つていて、その両側に、すうつと、作業場のならんでいるのが見える。そして、その向こうに遠く、美しい形をした白い建物と、高いアンテナの塔が見えている。

また、六郎は、この工場のまわりをまわつたことはないが、ずいぶん広さも広いらしいのである。そんな堂々たる工場の門に、こんなへたな字のふだがかかつてゐるのが、六郎にはおかしくつてならない。

けれども、おとうさんは、そうは言わない。

「六郎には、へたな字だが、おとうさんには、そうじゃない。あれは、
どうも、大変いい字だ。」

と言う。おとうさんは病院に勤めているが、字がすきなので、時々ひま
を見ては、字の展覧会へ行く。だから、おとうさんにそう言われると、
六郎は、そうがなあと思つて、明くる日通るとき、立ちどまつてよく見
てみる。けれども、いくらよく見ても、そんな、おとうさんの言うよう
な、大変いい字だなどとは思われない。大き過ぎて、ふだからはみ出しそ
うだし、形だつて、なんだか不ぞろいなのだ。おとうさんがなんと言っ
ても、六郎には、ほんとうとは思われない。

六郎は、さゆりさんにも聞いた。さゆりさんは、今度の学校で、
同じ組になつた女の子で、家が近いために、朝は、よくいっしょになる。
「そうね。へたでもないけど、字配りが変でしよう。」

さゆりさんは、そう言つた。

男の子は、みんな、へただと言つた。

「ぼくより、うまくないくらいだ。」
と言う者もいた。

そのうちに、六郎は、だんだん、そのふだが気にならないようになつ
た。そのへたな字を見ないわけではない。ちよつと見ることは見るのだ
が、初めのように、へただなあと思うほどでもなくなつた。

そうすると、六郎は、こんなことに気がついた。なるほど、あのふだ
の字は、六郎たちが書いた字のようにへたなのではない。固苦しかった
り、たどたどしかったりして、へたに見えるのではない。なんだか、形
が変だというだけである。

そう考へつてから、時には、その字が、なつかしく思われたりする

こともあった。

三 土曜日の夜

めずらしく、土曜日の夜、とおるが、六郎の家へやってきた。おとうさんも、おかあさんも、しきりに勧めるので、とうとう、とまることになった。夕食の時、とおるは、こんなことを、六郎のおとうさんに言った。

「ぼくらは、まだまだ青二才ですからなあ。もう少し、運転手を勤めませよ。そのかわり、近いうちに、決して故障しない電車を作ってお目にかけますよ。」

とおるの話によると、私鉄の本社の方では、とおるがいつまでも乗務員をやっているのは、こまるのだと言う。早く、車体や、機械の改良を

やる研究の方へまわってもらいたいのである。ところが、とおるは、乗務員の勉強を、自分が納得するまでは、やりたいのである。

とおるは、六郎のへやにねるようになった。六郎は、ひとりっ子なので、とおるといっしょにねるのがめずらしいから、なかなか話が多かった。

「そうそう、さつきわすれていたが、とおるが言い出した。」

「平和工場で、この次の日曜日に、バスツールの映画をやるそうだが、六ちゃん、行ってみないか。」

「平和工場で、映画もやるんですか。」

「うん、時々、やるらしいな。ぼくの、大学の友だちでね、内田という男が、あそこにおいて、テレビジョンの研究をやっている。その内田が、

ぼくにも、ひまがあつたら見に来てと言うんだ。六ちゃんが行きたかつたら、いつしよに連れていくよ。」

「行きたいなあ、ぼく。」

「じゃ、いつしよに行こう。今度の日曜の二時からだぜ。いいね、それまでに、むかえに来る。」

それから、とおるは、その友だちの話をした。

「内田は、すばらしい男でね。電気じゃあ、学校でもずばぬけていた。

おいしいことに、二年前、右手をけがしたので、今でも、手の仕事には不自由すると言っていたが、あの男のことだから、きっと、そんな事ぐらい、なんでもないだろう。」

とおるは、いかにも、なつかしそうに話した。

四 パスツールの映画

映画を見せる、平和工場の講堂は、研究所の向こうにあって、定員三百人ぐらいの大きさだった。とおると六郎が来たときは、もう八分通りの席がうまつっていたので、ふたりは、後から二側目の席に着いた。座席は、後の方が、少しずつ高くなっているの、そこからでも、ステージが、楽々で見おろせる。ラウドスピーカーからは、静かなヴァイオリンの曲が聞えていた。

「いいスピーカーだな。さすがに、ラジオ工場だけある。」
と、とおるは言った。

「六ちゃん、かべを見てごらん。かべが真四角でなく、まるみがついて
いるだろう。」

「ほんとうだ。どうしてでしょう。」

「あれも、音がはね返ってきて、入り交ったりしないように、くふうしてあるんだよ。なかなか、やってるなあ。」

六郎は、映画を見るのは久しぶりだった。だから大変楽しかった。

映画は、フランスの科学者パスツールが、さまざまな苦しみや、なやみに出あいながらも、いつも、まちがった考えをおしのけて、正しい科学者の道を進んだ、その偉大なおもかげを表わしたものだ。た。

消毒ということを入々が知らなかったために、母親たちの大切な命をたくさんうばった熱病も、パスツールが、熱病のもとになるばいきんを殺すということ、すなわち、医者がしん察にかかる前に湯で手をあらい、器具を熱湯に入れるという、そのことを考えついでからは、防ぐことができるようになった。ひつじの命をうばう伝染病も、パスツールの考え

た方法によつて、完全に防げるようになった。

ばいきんが伝染病のもとになるということ、伝染病を防ぐには、そのばいきんを殺すことが第一だという、パスツールの考えを、フランスの多くの学者たちは、なかなか信用しなかった。それどころか、パスツールを、何か悪だくみを持っている、うそつきのように悪く言う者さえあった。ほんのわずかな人たちだけが、パスツールの考えを信じて、ついでにきただけだった。もし、パスツールが、少しでも、自分の研究がやりいように、自分のくらしがしいいようにと考えたなら、そんなフランスにひときでもとどまっつてはいなかったであろう。けれども、パスツールは、そうはしなかった。なぜなら、パスツールは、自分の心から愛するフランスをはなれようなどとは、ゆめにも思わなかったからだ。

狂犬にかまれると、気ちがいになる。恐水病も、また、パスツールの力によつて、防ぐことができるようになった。それまでは、かまれたあとを焼いたり、おまじないをしたりするぐらいのことで、多くの人が気がいになり、死んでいった。パスツールは、どうしても、人々をこの不幸から救わなければならぬと思つた。

パスツールは、狂犬の口から出るつばきに、人間の命をうばうばいきがふくまれていると考へた。パスツールは、でしたちといつしよに、狂犬のつばきを取つて、いろいろと研究した。ところが、ある日、パスツールの考へに反対する学者のひとり、パスツールたちのすきをうかがつて、その狂犬のつばきを、自分のからだに注射した。

「いやはや、パスツールの考へはばかけたものですよ。ごらんささい、わたしは、パスツールが、命取りの毒をふくんでいると言つてゐる、

狂犬のつばきを注射したのだが、この通り、びんびんしてゐるではありませんか。」

その学者は、明くる日から、会う人ごとに、そう言つて得意がつた。初めは、今にもその学者が死ぬだらうと思つて心配したパスツールも、二日たち、三日たちするうちに、だんだん自分の考へがぐらつてきた。ほんとうに、あの、狂犬のつばきは、命をうばう原因にならないのかもしれない——。しばらくたつて、パスツールは、ふと、あの注射されたつばきは、狂犬の口から取つてから、相当日数がたつてゐることに気がついた。古くなると、ばいきんの力が弱くなつてしまふのではないだらうか。パスツールは、そう考へた。さるを相手にした実験によれば、たしかにそうだつた。しかし、一ぺん、古いつばきを注射されたさるは、その後、だんだん新しいつばきを注射していつても、別状のないこともわ

かつてきた。けれども、人間はどうだろうか。ほんとうのことは、どうしても人間を相手にしなければわからない。

パスツールが恐水病の研究をしていることを聞き伝えた不幸な人々は、救いを求めてきた。パスツールは、すぐにも、これらの人々に自分の方法をほどこしたかった。しかし、それは、決していい加減にできることではない。パスツールは苦しみ、なやんだ。けれども、母親に連れられて遠いなかからやってきた、狂犬にかまれた少年を見た時、パスツールの心はきまっていた。

「どうして、この、かわいい少年を、みすみす殺してしまふことができよう。自分がどうなるうと、この少年は助けなければならぬ。」



少年に注射をし始めてから、パスツールは、夜もほとんどねむらなかつた。ついに、パスツールは正しかった。少年は救われたのだ。

「君の誕生日には、必ず、手紙を書いてくれたまえ。」

と、この少年に向かつて、パスツールは言った。ひげの延びた、つかれ切った、この老科学者の目には、なみだが光った。少年の命は、救われた。パスツールも、おそろしい罪をおかさずすんだ。けれども、救われたのは、少年の命だけではない。何千何万の人々の、大切な命が救われたのである。パスツールのなみだは、その喜びのなみだであった。

こうして、長い間の苦しみの、ついに報いられる日が来た。フランスの学会は、パスツールの考への正しいことを認め、そのてがらをほめた。たえた。

七十才の誕生日に、パスツールは、ソルボンヌ大学で、記念のメダル

を受けた。フランス共和国大統領のうてによりかかって、年老いたこの
科学者は、やがて、だんの上に立つた。

「ある時期に、どんなかなしみがあろうとも、決して気を落してはなり
ません。」

と、バスツールは、わかい科学者たちに向かって言った。

「研究室や、図書室のような静かな場所で、生きなさい。そして、まず、
自分で自分にお聞きなさい。自分の修行のために何をしたか、と。そ
れから、諸君が進歩したら、次に、お聞きなさい。自分は祖国のため
に何をしたか、と。」

映画が終ると、とおるが手をたたいた。それは、やがて、うしおのよ
うに、講堂いっぱいにひろがっていった。

「よかつたなあ。」

とおるは、はらの底から感心したように言った。その時、

「および出しを申し上げます。および出しを申し上げます。」

と、アナウンスの声があった。

「大川とおるさま、大川とおるさま。おいでになりましたら、来賓室ま

でおこしくくださいませ……。」

「とおるさんですよ。」

「変だなあ。」

と、とおるは、不思議そうな顔をした。

「まあ、行ってみよう。六ちゃんも、いつしよに来たまえ。もしかする
と、何かいい事があるかも知れないからな。」

五 平和を荷なう

「あ、平島さん……」

とおるは、来賓室へはいると、びっくりして言った。

「やあ、大川君。」

と、頭のつるつるにはげたその人は、近寄ってきて、とおるの手をにぎった。つやつやした、子どものような顔の人だ。

「わざわざおよび立てして、どうも失礼しました。実は、きのう、ほかから帰ってきたばかりで、君の来ていることを、さつき聞いたもんだから、ぜひ、お会いしたいと思つてね。」

「平島さんも、いつもお元気でほんとうに結構です。」

「まあまあ、やっているわけだ。さあ、どうぞかけてください。そちら

は、弟さんですか。」

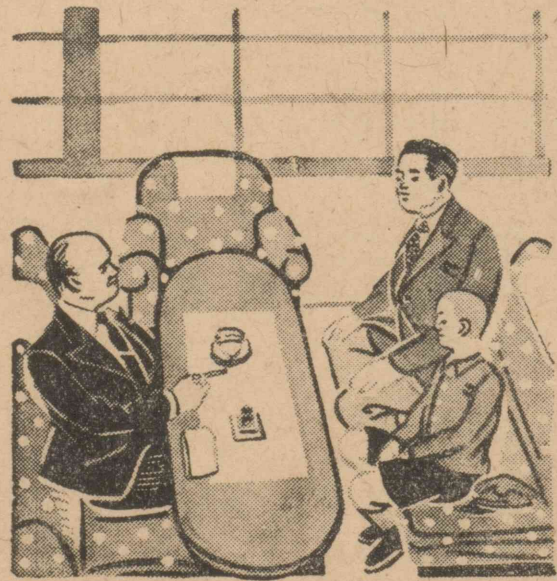
「いや、いとこです。木村六郎とい
います。」

「ああ、そう。六郎君、わたしは、
この工場をやっている平島です。
大川君とは、ラグビーのなかまで
ね。実は、学校がちがうから、か
たき同志なんだ。」

「いやあ、平島さんのコーチには、
ずいぶんお世話になりましたよ。」

平島さんは、始終、にこにこして、ゆかいそうだった。

「実は、君は、うちの工場へ来ていっしょにやってもらいたかったんだ



が、内田君の話だと、大分、君には考えがあるらしいんで、あきらめたんだ。」

「そんなえらい事じゃありませんが。内田は、きょうは、居ないんですか。」

「さあ、居ることは居ると思うんだが、きょうは休みだから、さがさせるのはひかえているんだ。あの男のことだから、居るとすれば、研究室に居ると思う。」

「内田の仕事は、近ごろどうですか。」

「いいなあ。すばらしいもんだ。内田君には、なんでも思う通りにやってもらってる。君も知ってる通り、内田君は、手が不自由だ。それなのに、だれにも負けない仕事をする。いや、負けないどころじゃない。あんな、たのもしい技師は、どこにも居ないんだ。仕事にかじり

ついたとなると、わたしなんか、全く問題にしないくらいだ。」

「もどから、そうだったんです。がんこなやつでした。」

「そうだ。そうなんだ。気に入ったなあ。実はね、」

平島さんは、そこで、思い出したようにわらい出した。

「君たち、門のところのふだを見たらう。」

「ええ、知っています。へたな字でしょう。」

と、六郎は、思わずさげんだ。

「どうして、あんな字を出しておくんですか。」

「あれはね、六郎君。内田君が、不自由な手で書いた字だよ。もつとも、内田君にいくら言っただって、書く訳はない。わたしは、工場全体の者から募集して、書かせたんだ。そして、その中から取ったのが、あの字だ。六郎君の言う通り、あれは、たしかにへたな字だ。けれども、

どの、じょうずな字よりも、わたしは、あれが気に入った。あれは、
静かな、それでいて、実に、気がいのあふれている字だ。——わたし
しは、平和工場を、いや、平和工場というよりも、平和そのものを、
内田君に荷なつてもらいたいと思う。」

平島さんは、ふたりに向かつて、そう言った。

六郎は、この話を、上原ひろしに聞かせた。ふたりは、時々、平和工
場の研究室へ、内田さんをたずねていった。内田さんが研究しているテ
レビジョンは、どんなに、ふたりを喜ばせたことであろう。けれども、
何よりも、ふたりがすきになつたのは、「平和工場」と書いた、そのふだ
であった。

12

りんご病院

ひろしのアルバムの終りの方に、白い建物の前にならんで大
勢でとった写真がある。女の子たちが、多い。ひろしは、後
の方からようやく首を出しているだけである。この写真の名
前は、「りんご病院」となっているが、この建物は、ほんとう
は、町にある国立病院である。なぜ、「りんご病院」という名
前がついているのだろうか。

一 キューリー先生

木田みちよ先生は、山本さゆりのなかよしである。さゆりばかりでは
ない、女の子たちみんなのなかよしである。木田先生は、国立病院の眼
科の先生で、病院にねとまりしている。木田先生と知り合うようになった

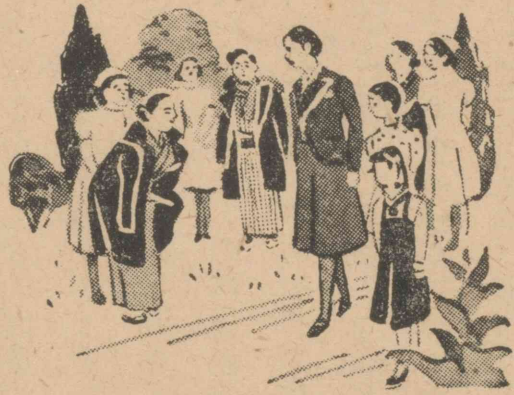
たのは、病院のお医者さんや、看護婦さんたちが、駅の前に出張して、通る人たちのために、けがや、しもやけや、あかぎれや、その他いろいろな手当をしてくれた時からのことである。その時、さゆりの友だちの、青山たか子の目を調べてくれたのが、木田先生だった。

木田先生は、せいが高く、黒い地味な洋服が、すき通るような顔の白さによく似合っていた。そういう木田先生のように、いつか写真で見たキューリー夫人にそっくりだった。そして、たちまち、女の子たちは、このキューリー夫人となかよしになってしまった。木田先生の誕生日は、十二月十日だった。そこで、毎月十日には、子どもたちは、めいめいの家へ木田先生を招待した。木田先生は、歩くときも、話すときも、いつも静かだった。そのそばに居ると、だれも心があたたまるような気持ちになるのだった。

日曜日には、たいてい、だれかが木田先生のへやをたずねた。そのへやはせまかったが、清潔だった。午前中は、先生の勉強時間だった。南向きの大きなガラスまどから、いつぱいに午後の日がさしこんでいるところで、先生からいろいろな話を聞くのは、ほんとうに楽しかった。かべには、一まいの西洋画がかかっていた。

けれども、そのへやの何よりの持ちようは、たくさんの本だった。本ばこにもはいり切らないで、何さつも何さつも積み重ねられている本だった。先生のつくえの上にも、必ず、厚いむずかしそうな本が、開いたままで置いてあった。

うすいクリーム色の病院は、外から見ると少しさびしそうだったが、内部は明るくて、きれいだった。採光や、通風や、へやをあたたかにする設備なども整っていた。しばふには、近い中に退院する患者さんや、



看護婦さんたちが出て、あちこちにすわっていた。そして、女の子たちを連れて先生がそこへやってくると、みんなにこにこしながら、あいさつをした。その患者さんたちは、口々に、先生と別れるのがつまらないと言った。病院が、こんな楽しい所だとは思わなかったと言う、その人たちの言葉を聞きながら、女の子たちは、ほんとうにそうだと
思った。そして、「わたしの務めは、患者さんのからだを見てあげるだけでなく、心も見てあげることです。」という、先生の言葉を思いだすのだった。

二 四は、このりんご

木田先生の誕生日、十二月十日には、病院の方々みんなに何かお送りしようということ、さゆりたちは相談した。そこで、十一月に、学校でバザーが開かれたとき、さゆりたちは先生にお願いして、そのために特別の場所をきめていただいた。みんなが心をこめて作った人形や、手さげぶくろや、その他いろいろのものは、一つ残らず売れた。

「これなら、りんごが二はこ買えるわ。」
と、さゆりたちは、売りあげのお金を調べて喜んだ。それから、すぐにすみおか村にいる、いとこのあけみに手紙を書いて、おじさんに、りんごを送ってくださるようにたのんだ。あけみからは、すぐに、返事が来た。

りんごのはこが届いたのは、木田先生の誕生日の二日前だった。
「まあ、どうしたんでしよう。」

さゆりはおどろいた。りんごばは四つある。たしかに、送ったお金は、二はこ分だったのに。さゆりは、みんなに集まってもらって、はこをあけた。なんという、みごとなりんごだろう。

「わあつ。」

と言って、みんなは、手に手に、真赤なりんごを取り出した。

どつどど、どつどど、どつどど、どつどど。

ああまいりんごも、ふきとばせ。

すっぱいりんごも、ふきとばせ。

どつどど、どつどど、どつどど、どつどど。

.....

いつのまにか、でたらめな節で、みんなが歌い出していた。みんなは、一つ一つ、りんごに紙が結びつけてあることも、気にしなかった。

いや、それより、はこの中には、次のような手紙がはいっているのだ。みんなが、それを読んだら、どんなに喜ぶだろう。

さゆりさん、りんごがなかなか着かないので、心配したでしょう。でも、必ず、まに合ったと思います。

私たちは、病院のお気の毒な方々をおなぐさめしようという、あなたがたのお話を聞いて、ほんとうに感^れげきしてしまいました。それで私たちは、相談をして、私たちも、病院の方々に、私たちの大すきなりんごをお送りしようときめたのです。私たちには、この夏の日曜日、みんなで働いて貯めたお金があります。私たちは、何かみんなの役に立つ事のために、それを使おうと思っていました。そのお金を、こんどのりんごを買うのに使おうというのです。

私たちは、ふくろはりどふくろかけをして、働きました。みんないっしょうけんめいにやりましたので、いっふくろがたくさんできました。さゆりさんも知っているでしょう、ふくろには、新聞紙がいいので、一まいの新聞紙から、ふくろが六つ取れます。日曜日一日に、ひとりて千近くもはった人もありましたので、全部で二万近くもはる事ができました。その次の日曜日に、村の共有地のりんごのふくろかけをしました。早い人は、まだうす暗いうちから出かけてきました。一日で、大体、二たんぶ（一九八三・四平方メートル）ほどの、ふくろかけをやりました。お金は、その時にいただいたものなのです。

ことしのりんごは、収量はたいへん少かったけれども、できがいいので、つぶぞらいです。村の人たちは、私たちのために、特に、いろいろな種類の、おいしそうなものを選んでくれました。私たちのりんごは、き

つと、病院のみなさまに喜んでいただけたらうと思います。数が少ないので、たくさんめしあがっていただけなのが残念ですが。

それから、二つのはこの分には、私たちの作ったはい句や、歌や、詩を書いた紙を結んでおきました。病院のみなさまに読んでいただきたいと思います。あとの二つのはこの分には、できましたら、あなた方を結んでください。

りんご園日記は、私の書いたものです。へたなものですが、これも読んでいただければ、うれしいと思います。

こちらは、もうしもおりました。息の白く見える日が続いています。みなさま、どうぞ、おからだご大切に。

山本 あけみ

山本 さゆり様

三 院長先生の話

病院へは、ひろしたちも、いっしょになつて、りんごを持っていった。年取った院長先生も、木田先生も、なみだをうかべて、喜んでくださった。

食堂のまるテーブルの上に積み上げられたりんごの山を見ると、患者さんも、看護婦さんも、みんな、びつくりしてしまった。

「木田先生が、どうしてもお話しになりませんから、私から、ちょっとお話しいたします。」

院長先生は真中に進み出て、こう言った。

「このりんごは、この町の小学校の子どもさんたちと、すみおか村の子どもさんたちが、自分たちで働いて、送ってくださったものです。患

者さんも、看護婦さんも、みなさんでめしあがっていたきたいということです。きょうは、木田先生のお誕生日です。子どもさんたちは、そのお祝いのために、こんなに大勢で、来てくださいました。」

それから、院長先生は、子どもたちの方へ向いて、

「みなさん、ほんとうにありがとうございます。病院の者みんなにかわつて、心からお礼を申し上げます。私は、元気で心のやさしいみなさんを、こうやって見ていますと、なんだか、楽しくて楽しくてたまらないのです……」

院長先生は、ここで言葉を切つて、ちよつと目をつぶつた。それから、次のように話を続けた。

「今、私は、ひとりの青年のことを、思い出しました。その青年の話をさせてください。その青年は、のんきな、気のいい、いつも希望でも

ねがふくれあがつているといったふうのわか者でした。どんな仕事をやるようになったても、この性質を持ち続けていつてくれる以上、それで満足だと家の人々は、思っていました。ところが、急に、青年は、目の病氣になつて、ほとんど見えなくなつてしまいました。何よりも家の人々が心配したのは、青年が、そのために、心まできずつけられてしまふのではないかということでした。そればかりが、心配でたまらなかつたのでした。

ところが、青年が病院に居たときのこと、ある冬の午後、——それは、きつときょうのような日だつたでしょう——うとうととねむつているうちに、何か楽しいゆめを見ました。その時、何か、大変にいいにおいがしてきました。そのにおいは、青年に、美しい世界を思い出させました。どこまで行つても続いている、白いりんごの花、五月



のさわやかな空気の中を飛びまわっているみつばちの羽音、どこからか聞えてくる子どもたちの元氣なわらい声——それは、青年が、いつか歩いたことのある、りんご園の思い出でした。むねの中にまでしみ通ってくるような、け高いにおいの中で、その時、青年は、わかかわかしい希望にふくれあがつ

ていたのです。青年の心には、ほのぼのと明るみがさしてきました。ゆめからさめた青年が、ベッドでかいたそのいいにおいは、ひとりの見知らぬ女の子さんのおくり物でした。そして、その、かんばし

いりんごのおくり物は、青年の心に、それまでわすれそうになっていた希望をよみがえらせてくれたのです。そして今では、青年の目にも、少しづつではありますが、ほんとうに、光明がさしてきているということですよ。

私は、あなた方のりんごを見ていますと、どうしても、その青年のことを考えずにはいられません。青年にりんごを送ってください。つた女のお子さんに、どんなに家の人々が感謝しているか、そして、その方に、どんなに、お会いしたいと思っているか、それを、ほんとうに、どうしたら、私は、お伝えすることができるとしようか……。」

13

りんご園の日記と冬の歌

一 りんご園の日記

山本あけみは、山本さゆりのいとこである。あけみの住んでいる地方では、たいていの家で、りんごを作っている。あけみは、りんごが大好きだし、りんご園のお手伝いをするのが大好きだ。これは、さゆりたちのところへ送られてきた、あけみの日記である。

一月〇日

暗れて、めずらしくあたたかい。岩三^{さん}さんといっしょに、りんごの木の見まわりをする。西の方から始める。少し雪をかぶった、麦の緑が美しい。木の皮のはげかかっているところをはぐと、べつとりと、虫のたまごがついている。これをかき落して、はいた木の皮といっしょに焼く。

「なんてあたたかいんだろう。」
と、岩三^{さん}さんが言う。

「ほんとうに、あせが出るくらい。」
と、わたしが言う。

少し高い所から見ると、東の、遠い山々の雪が、銀のようにかがやいている。

二月〇日

岩三さんが、よけいなえだを切り落して、木を整える。わたしは切り落されたえだを一ところに集める。きようは晴れているが寒いので、岩三さんはスキーぼうを耳までかぶり、わたしはずきんをかぶっている。えだがあまりこみ過ぎないように、張り過ぎないようにと、考えながら、えだをおろしていく。強過ぎるえだ、弱いえだ、虫のつきやすいえだなどもおろす。けれども、一つの紅玉りんごが熟するには、葉が三、四十まいは必要だというから、えだをおろし過ぎてもいけない。はさみの音が、パチンパチンと、気持よくひびく。

「岩三さん、この木は、何年ぐらいいになるの。」

「十五年だ。」

わたしは、りんごの木の、はだの色がすきた。じつと見てみると、赤みがかつたそのはいい色が、なんとも言えない深みのある色に見えてくる。

三月〇日

岩三さんに聞きながら、よけいな花芽をつんでいく。つみ取ったかわいい芽を、わたしは、上着のポケットに入れる。まだ風は冷たいけれども、どの木も芽ぐんできて、あたりが、なんとはなしに、あたたかい色に見える。

四月〇日

秋に、こやしをやれなかったので、深く耕して、こやしをする。わたしは、ほるのを手伝う。わたしが、大きなシャベルを使うのがおかしい

と言って、みんながわらう。土は、ねばらないので、ほりやすい。時々、小鳥の鳴き声が聞える。手をやめて、あせをふきながらそれを聞いていると、うつとりしてしまふ。

五月〇日

わたしは、りんご園を歩きまわる。真白い花が、わたしの左右に、上に、いっぱい。わたしは、うすい上着を着て、素足にズツクのくつをはいている。白い花のいきが、わたしの心の中まではいつてくるような気がする。どこにも、おとなの人たちや、子どもたちの、高い話声や、わらい声が聞えている。

かんばしい風の中を、わたしは歩きまわる。

六月〇日

今月は、ほんとうにいそがしかった。

象鼻虫を取ることに。ポルドー液をかけてから、ふくろをかけること。ふくろかけを終えてから、耕すこと。石ばいと木ばいの追いごえをやること。よけいな実をつみ取ることなど、ずいぶん、お手伝いの仕事も多かった。

七月〇日

ふくろかけの時見落したものに、ふくろをかけてまわる。もうだめになつたものは取りのぞく。相当大きくなっているものもある。

東の山々は、青くかすんでいる。りんごの木のかげが、はい色の土のおもてにくつきりとしるさされている上を、ふんでいく。わたしたちは、もう白いシャツ一まいで、はだした。

八月〇日

今月の初めに、ふくろを取った「祝い」の収穫かたを始める。「祝い」は、このあたりのが早くて、味もいいのだという。岩三さんの取っていくりんごを、わたしは、かごの中に入れる。「祝い」はうすい緑色で、見るからにすがすがしい。十時ごろ休んで、二つ三つかじる。キユツキユツとハンケチでふいてから、かぶりつく。

「岩三さん、おいしいのね。」

「ああ、ことしのできはいいな。」

岩三さんは、ひげだらけの顔でほおえむ。岩三さんは、こわい顔をしているけれども、子どもがすきなのだ。りんご作りを始めてから、まだ四年目だけれども、だれよりも成績せいせきがいいのだという。

「この歌、知ってるかい。」

「どんな歌。」

岩三さんは、静かに歌い始める。

なんという

しおらしきぞ。

水車小屋の屋根に

小さな草生かい、

つばめ飛ぶ、

すいすいと飛ぶ。

「知りません。だれの歌かしら。」

「うん、わたしのすきな歌だ。」

岩三さんは、また、ほおえむ。サクサクと、わたしは、また、りんごをかじる。

九月〇日

急にすずしくなった。雲の色も形も、なんだかすっかり秋めいてきたようだ。ふくろをはずした「紅玉」は、その名のように、まるで、かがやく赤い玉のようだ。なんとという美しさだろう。

十月〇日

「ゴールデン・デリシヤス」、「赤デリシヤス」などの収穫。「国光」、「インド」などのふくろをはずす。

十一月〇日

たいひをする。これは、四百貫ばかり。くん炭を四十貫、園中に、たがやして入れる。

十二月〇日

すっかり収穫の終つたりんご園を、わたしは、ひとりりで歩く。

寒い、寒い日。今にも雪の来そうな、なまり色の空。白い雪のすじを見せている遠い山々——

りんごの木は、「わたしの仕事は終わりました。」というように、静かにねむっているようだ。

わたしは、りんごの木の下にすわる。目をつぶると、収穫の時の、あのにぎやかな人声が、わたしの耳に聞えてくる。いつまでもいつまでも、聞えてくる……。

二 冬の歌

1 子どもの作った歌

朝の日をせに受けながらきょうもまた弟どふたりかれ草をかる
学校へいそぐ友の顔寒そうにきりの中へとかけ出していった
はあはあと真白な息のたちのぼるけさの温度は零下二度五分
葉は落ちて小えだもかれてさびしそう林をのぞく子どもたちの目
手に息をかければ白い息がたちふわふわとゆらぐ朝庭の中

目をさまし街路を見ればガラス戸にきりがガラスをとり囲んでる

2 おとなの作った歌

蛛の小さき歩みいそがせてちよ紙買いに行く月夜かな
道ばたのかれかや草におくしもの朝日をはじき光るきらきら
日の出ごろ街道のしも真白にからからつづくひやくしよの車
新しき手ぶくろはめてここちよし冬のちまたを行くあしたかな
ひとり親しくたき火しており火の中にまつかさが見ゆもゆるまつかさ
道のべのたき火かこめる人々のなかにわけ入りあたらせてもらう

一 道具さえあれば

上原ひろしが、みんなと、初めて南ただしのももやしきの家へ行ったときに、こんな事があつた。

ただしのへやには、スキーが、いつでも、大事そうに、きちんと本ばこの横に立てかけてある。それを見て、

「やあ、スキーがあるんだね。」

と言いながら、ひろしは、そばへ行つて、うらやましそうに、手でさわつてみた。

「ずいぶん使つてあるらしいね。南君は、前からやつてるの。」

「南君は、スキーの名人だもの。」

と、太郎が言った。

「何しろ、南君は、北海道に居たんだからね。」

「上原君は、どうなんだい。」

と、黒田良三が聞いた。

「ぼくかい。ぼくは、まだすべつ

たことがない。君はどうなんだ

い。」

「南君には、ちよつとかなわいな。」

「ほんとうかい。君は、自信があるんだなあ。」

「今に、すぐ、南君にも負けないうようになるさ。上原君は、スキーはだ



めかなあ。ここでは、みんなすべれるんだぜ、君。」

と、良三は、得意そうに言った。

「スキーなんて、なんだい。自然にすべれるようにできてるんじゃないか。道具さえあれば、だれだってすべれるんだ。」

「じゃ、実際にやってみたまえ、君も。」

「ああ、スキーぐらい、なんでもないさ。」

「上原君は、すごいなあ。」

と、ただしが言うのと、

「また、雪がふるまでには、大分、間があるんだから、ゆっくり練習するといよいよ。」

と、太郎がこんなじょうだんを言ったので、みんなが、わあつとわらった。

話は、それだけだった。

南のおじさんの、スキーがすばらしくうまいということが、知れわたると、村に、スキーをやる者が大勢出てきた。子どもたちにも、この前の冬は、大勢すべる者が出てきた。けれども、スキーは、道具を買うとなると、相当高いので、だれもが買うという訳にはいかない。にいやや、うちの人のだれかのを、がまんしていつしよに使うのなら、買いやすければ、子どもだけの場合は、そうはいかないのである。東一が、そのひとりだった。

赤星東一は、おかあさんとふたりぐらしてである。おかあさんは、協同組合の仕事をしている。だから、東一は、不自由もなく学校へ通っているけれども、お金が特別にかかるようなものは、よほど必要なものでなければ、買わなかった。スキーなどは、もちろん、買わなかった。

この前の冬、みんながスキーをやったとき、東一もなかまにはいった。先生かぶのただしは、自分のを東一に貸して、みんなに教えてまわっていた。だから、東一も、ゆかいにすべれたのであった。

さつき、その東一がそばに居るのに、ひろしが、「道具さえあれば」と言つたのは、もちろん、そんなことを知らなかったからである。

そういうことがあつてから、太郎は、時々、

「赤星君も、スキーを持っていてくれればいいな。」

と、思った。ただしも、同じ考えだった。ただしのスキーも古くなつていたし、少し小さいので、新しいのがほしかった。けれども、ただしには、東一に、スキーを持たせたいという気持の方が強かった。

「ぼくは、すべらなくてもいいんだけれど、赤星君だって、やっぱり、自分のスキーの方がいいだろうからなあ。」

と、ただしは、太郎に向かつてそう言うのであった。けれども、ふたりとも、いい考えは思いつかなかつた。

ただしは、スキーを、自分のへやから持ち出して、幸助じいさんに預けた。それで、冬が近づくまで、しばらくの間は、スキーの話は、みんなから遠く離れた。

二 手製のスキー

「あ、雪だ。」

と、だれかが言った。みんなは、弁当を食べながら、言い合わせたように、まどの方を見た。

みんなの目をかすめるように、ちらっちらっど、小さいはねのような雪がふっている。寒さにちこまつていた教室が、急に、にぎやかにな

った。

「積もるかな。ねえ、黒田君、積もるだらうね。」

太郎が、となりの良三に言った。

「積もるよ、きつと。だって、今まで、ずいぶん、ふらなかつたんだもの。」

「うん、ラジオの長期予報があたりそうだね。」

太郎は、弁当ばこをしまつて、まどのそばへ行つた。

雪は、はい色の空から、ふいとすがたを表わして、身軽にふつてくる。黒い土のおもてに落ちると、すぐ、ふつと消えて、すいこまれるように見えなくなる。その一つ一つを見ていると、なんだか目がまわるようだ。

ただし、にこにこしながら、そばへやつてきた。

「春山君、この調子だと、すべれるかも知れないね。」

「うん、そうなればいいなあ。」

太郎も、にこにこして答えた。

「ごとしは、ちつともすべらなかつたからなあ。」

「そうそう、春山君。君に見せたいものがあるんだ。きょう、ぼくのうちへ来てくれないか。」

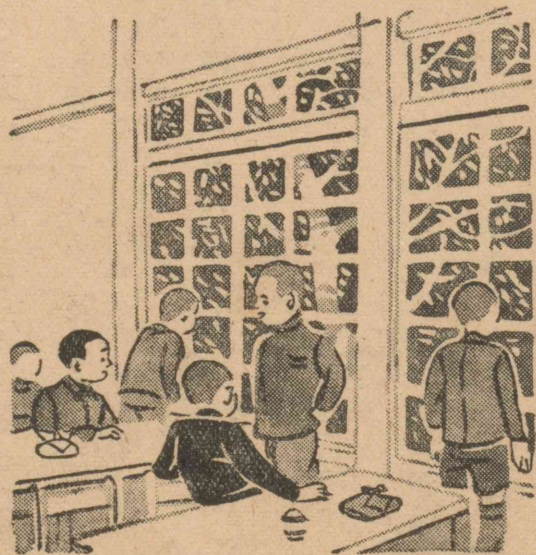
と、ただしは言った。

「なんだろう、見せたいものつて。」

「それはね。」

と、ただしは、ますます、にこにこする。

「来ればわかるよ。」



「うれしそうだなあ、君は。」

そのうちに、みんながまどのそばへやってきたので、また、雪の話になつてしまった。

夕方、少し早めに、太郎は、ただしの家へ行った。ただしが持つてきて見せたのは、とび色の、ニスがかてか光っているスキーだった。

「やあ、新しいんだね。いいなあ、君は。」

「君は、せつかちだなあ。これは、ぼくのじゃないだよ。」

「でも、子どものじゃないか。」

「それはそうさ。だけど、ぼくのじゃないのさ。」

それは、幸助じいさんの手製のスキーだった。

二、三日前、幸助じいさんからそれを見せられたとき、ただしはおどろいた。それは、ただしの使っているのより、りっぱなスキーである。

もつとも、幸助じいさんが、たいへん器用なことは、ただしも知っていた。たいていの道具は、時間がありさえすれば、幸助じいさんは、自分で作つてしまう。だから、幸助じいさんのへやには、よく、大工道具や、木のくずなどが散らばつていた。

「幸助さんはね、」

と、ただしは言った。

「これを、赤星君にあげてくださいつて言うんだよ。」

「そうか、よかったなあ。」

と、太郎は、うれしそうに言った。

幸助じいさんが、赤星君にスキーを作つてくれたのには、わけがあつた。三年生の時、子どもたちが失敗をして、幸助じいさんの大事なつりざおを、折つてしまったことがあつた。その時、赤星君は、おとうさん

のかたみのつりざおを、幸助じいさんにおくつた。それは、もとのつりざおよりも、幸助じいさんの氣にいった。その時から、子どもたちとかよしになった幸助じいさんは、「まるで、孫から、むすこのつりざおを、ゆずられたような氣がする。」と、よく、人に言い言いたものだった。

「幸助さんは、赤星君のことを孫だと思ってるんだからね。」
と、ただしがそう言うど、

「ぼくだって、幸助さんのような人なら、おじいさんになつてもらいたい
いさ。」

と、太郎が言った。ふたりは、ほんとうにうれしそうだった。

三 雪のすばこ

かしの木広場は、すっかり雪をかぶっている。どの木も、どの木も、ふつくらした雪を、こずえや、えだの上のせて、静かに立っている。

まだ、だれにもふまれない雪の上に、ようやく日がさし始めて、雪の表面が、さらさらと、銀のようにかがやいている。

その静かな空氣の中を切つて、時々、チツチツと聞えてくるのは、えをさがしに来ている小鳥であろう。

その広場のはずれのところに、ぼっかりと、黒いスキーぼうが見えた。だんだん顔が見えてくると、それは、ただしだった。

「ゆつくりでいいよ、赤星君。」

と、ただしは、後をふり向いて言った。少し間をおいて、東一の顔が出てきた。真赤な顔をした東一は、そこまで来ると、はあつと息をはいた。

「くたびれたらう、赤星君。」

「ううん、平気だよ。」

ふたりは、ならんで、そこにしゃがんだ。

雪におおわれた光村は、なんといい美しさであろう。そして、その上に、あまねくかがやいている朝の日光は、なんといいすばらしさであろう。ただしは、北海道の、すさまじい**暴風**の**吹雪**を知っていた。そして、ぶきのやんだあとの、静まりかえった朝のけしきを、今でも、わすれることはできなかつた。三年前、光村へ来るまで、小さいただしは、ひとりぼっちのはにかみやだつた。そして、こういう朝、ひとり雪の上をすべっているときだけは、生き生きとした顔をしていた……

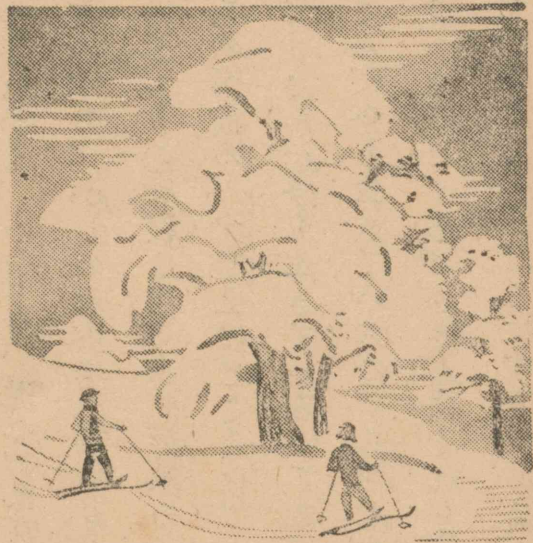
ふたりは、やがて、大きなかしの木の下へすべっていった。かしの木は、白い、かがやく城しろのようだつた。ふたりは、かしの木の後のけやきの下にスキーをぬいで、登り始めた。バサツバサツと音を立てて、木の

上の雪が、地面に落ちた。

ふたりのすがたは、かしの木の、

白い雪のかけにかくれた。

東一のはいていたスキーは、ただしからおくられたものだつた。ほんとうは、幸助じいさんは、ただしのために、スキーを作ってくれたのだつた。けれども、ただしが喜んだの



は、自分が新しいスキーをはけるからということではなくて、東一におくるスキーができたということだつた。

さつき、ただしが東一のところへ、新しいスキーを持っていったとき、東一は、そんなりっぱなスキーはいらないと言つた。けれども、ただし

は、承知しなかった。

「みんな、かしの木広場へ行くことになってるんだ。君が行かないなんて。」

と、ただしは、おこつたように言った。

それから、ふたりは、道々、東京の竹村先生に送る「村のアルバム」に、雪の中の、かしの木広場の様子を書こうと話合ってきたのであった。

ふたりのすばこは、かしの木の上の方にあった。あの、おかあさんたちの名前の、少し上のところ。もし、農学校の先生だったただしのおとうさんが今も生きていたのであったら、そして、また、東一のおとうさん、きつと、おとうさんにそれを見せたことであろう。そして、それを、おかあさんのすばこにするのだと、顔をかがやかせながら、話したこと

であろう。

「ここだ、ここだ、赤星君。」

と、ただしがさげんだ。東一が、下から登ってきた。ふたりとも、ぼうしの上は、雪だらけだった。

すばこは、屋根の上に、少しばかりの雪をのせていた。ただしは、その屋根をあげて、中をのぞいた。

「居ない……。ぼくのは、あきやだよ、赤星君。」

「そうかい……。やあ、ぼくのも、居ないや。」

「でも、かわいいすだね。まだ、あたたかそうだよ。」

「ぼくのも、そうだ。」

ふたりは、しばらく、すばこの中の、小鳥の居なくなったすを見ていた。

「小鳥たちは、また、春になったら、帰ってくるだらうね、南君。」

しばらくたつてから、東一が言った。

「帰ってくるとも。きつと帰ってくるさ。」

ただしは、そう答えた。

ふたりの顔は、雪の反射で、白く光っていた。

四 先生の手紙

めずらしく積もった雪も、ゆめのように消えて、あたたかい日が続いた。

ある日、太郎の家へ、この秋、東京へ行かれた竹村先生から、手紙が届いた。それは、次のような手紙だった。

みなさんの「村のアルバム」、確かに受け取りました。ほんとうにあり

がどう。あなた方のかいてくださった一まい一まいの絵は、どれも、きのう別れてきたように、わたしの心に、はつきりときざみこまれている。村の自然ばかりです。そして、それにそえてくださった一まい一まいのおし葉も、わたしには、それが、どこにいつごろはえていたかということを、今でも、はつきり言うことができます。

わたしは、東京へ出てきてから、しばらくは、あなた方のことばかり考えて、ぼんやりとしていました。朝、目がさめると、ふつと、光村に居るつもりになってしまったことも、一度や二度ではありません。今でも、時々、あなた方ひとりひとりの声が、わたしの耳に聞えてくるような気がしてならないことがあるのです。そういうわたしのところへ届いたあの「村のアルバム」は、何にも比べることのできない、うれしいおくりものでした。

村に居た時のことを、今、静かに考えてみると、あれもしたかった、これもしたかったと思うことばかりです。特に、あなた方に対しては、考への足りないことが多かったと思います。けれども、わたしは、決して、それを悲しんだり、さびしく思ったりしてはいないのです。わたしのやつた事は、考への足りない事が多かったけれども、あなた方は、いつも、いい方へいい方へ、明るい方へ明るい方へと、のびていつてくれたのです。

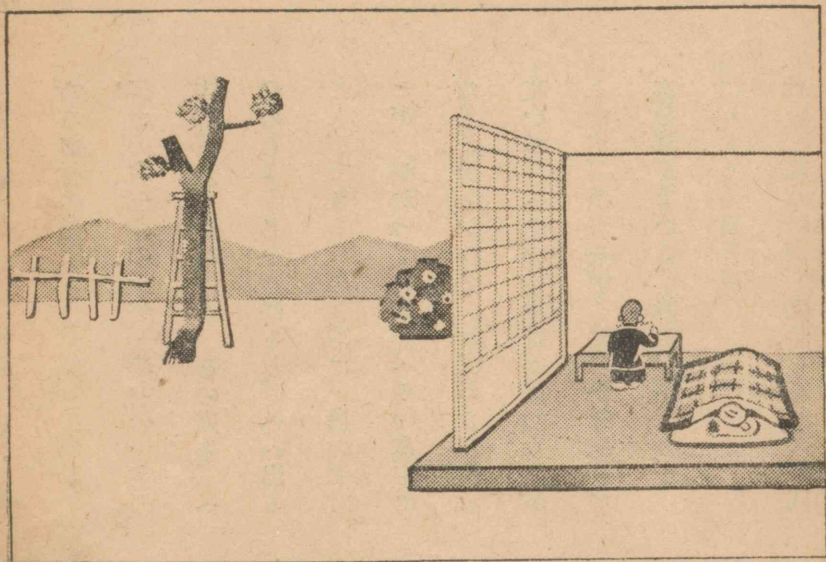
あなた方の、あの、元気な顔や、むちゆうてとびまわっているすがたを思いだすと、わたしは、思わずにこにこしてしまいます。

あなた方の、あの、きちんとした身なりを思いだすと、わたしは、ほんとうにすがすがしい気持になります。

あなた方の、しっかりと話した方や、はきはきした言葉使いを思い出すと、わたしは、なんとも言えない、たのもししい気持になります。

こんなことを言うと、「竹村先生は、あんなにはめてくださって、きみが悪い。」と、あなた方は思うかも知れません。いや、そういう、あなた方は、ずかしそうなわらい顔が、目に見えるようです。けれども、わたしは、おせじを言っているではありません。どうして、あなた方の先生だったわたしが、今、おせじなどを言うことができるでしょう。

南ただし君が、自分のために作ってくれた幸助さんの手製のスキーを、赤星東一君におくったこと、自分は古いスキーでがまんしたこと、それを春山君の手紙で読んだわたしは、楽しさで、むねがふくらむようでした。考えてみれば、これは、あなた方にとっては、当り前のことです。いや、だれがやっても、それは当り前のことにちがいません。そして、世界のどこかでは、こうしたことが、いつもいつも行われているに



ちがいありません。けれども、こうした、思いやりの心が、いつもいつも、わたしたち人間の世界をおどしてくれるのだと考えることは、なんとという楽しさでしょう。

あなた方のような、素直な、正直な、思いやりのある、少年や少女といっしょにくらしてきたことは、わたしにとって、どんなにしあわせてあつたかわかりません。自分たちの力で、自分たちにできることを、せいっぱいやっていく——それが、あなた方のやり方でした。それが、どんなにつまらなく思われ、どんなにばかばかしく思われるときでも、あなた方は、いつも、まじめに、熱心にそれをしとげました。わたしはあなた方が、きっと、これからも、いつまでもいつまでも、そうであつてくれることを信じています。

では、五年生のみなさん、どうぞ、おからだを大切に。

15

劇

うぐいす

人物

おばあさん 六十五、六才

ひかる おばあさんの孫

十二、三才

春吉 ひかるの友だち

十二、三才

久雄

初次

時

三月の終りごろの、晴れたある朝。

ある山村の農家。

舞台の右三分の一が、農家の一室の内部。左三分の一が、その庭先。へやのしょうじをあけると、外へ出ることが出来る。のき下に、鳥のすばこが、かかっている。へやの真中に、ねどこがしかれて、おばあさんがねている。へやのおく寄りにつくえがあつて、ひかるが、せなかを向けて本を読んでいる。静かな朝である。にわたりの鳴き声。

続いて柱時計が、九時を打つのが聞

すぎのなえを植えているころだ

ね。

おばあさん、起きようとする。

ひかる おばあさん、起きるの。起きてはだめですよ、また、熱があがりますよ。

おばあさん もう、だいじょうぶだよ。あと

四、五日で、この土地ともさよならをしなければならぬのに、いつまでものんきにねていられないじゃないか。

ひかる 無理をしちゃいけないって、つきもおかあさんが言つてたじ

える。

おばあさん、首を上げる。

おばあさん ひかる。今、時計が鳴つたよう

だが、いくつ鳴つたのかね。

ひかる おばあさん、九つ鳴つたんだよ。

おばあさん え、え。(おばあさんは耳が遠いのである。)

ひかる (そばへ寄つて) 九時を打つたんですよ。

おばあさん ああ、九時かい。もう、みんな

はとうげに着いて、ぼつぼつ、

やありませんか。

おばあさん このいそがしい時に、ねこむなんて、ほんとうに情ない話だよ。ぼつぼつ起きるけいこをしなくつちやね。

おばあさん 起きてしょうじをあける。外をながめて、

おばあさん ああ、いい気持だ。山を見ると晴れ晴れした気持になるよ。

ひかる あ、あの雲を見てごらん。ふうわりとふくらんで――

あれが春の雲だよ。

ひかる おばあさん、東京へ帰るの、う

うれしいですか。

おばあさん ひかるはどうだい。

ひかる ぼく、うれしいんだろうと思うとさびしくなるの。いやなのかなあと思うと、うれしくなるの。わからないや。おばあさんは。

おばあさん 住めば都と、むかしから言われているからね。もう、何年もここに住みついて、村の人たちからも親切にされると、このごろでは、生れ故郷ふるさとのような気がするんだよ。

ひかる ぼくの友だちは、東京よりも、

こつちの方が、ずっと多いんですよ。

おばあさん それはそうだよ。小学校はずっとこつちだものね。おばあさんの友だちだつて、こつちの方が多いかも知れないよ。

ひかる おばあさんの友だちが。そう。でも、おばあさんは、たいていは、うちにばかり居るのに、そんなにこつちに友だちがあるの。そりや、あるさ。ひかるは、友だちといえ、人間ばかりだと思つてるのだろう。おばあさん

おばあさん いいえ、きつと帰つてくるよ。

あんなにかわいがつたものが、帰つてこないなんてことがあるものかね。

ひかる 帰つてくるかなあ。

おばあさん ああ、帰つてくるとも。さよならをしにぐらいは、きつと帰つてくるよ。

ひかる おばあさんは、ずいぶん、小鳥がすきなんだねえ。

おばあさん ひかるは、うぐいすがきらいかい。うぐいすの声は、いつ聞いてもいつ聞いても、楽しいもの

の友だちは、ほら、その木だつて、向こうの土手だつて、森だつて、あの山だつて——それから、花だつて、鳥だつて、みんな友だちなんだよ。

ひかる ああ、そうか。それでわかりましたよ。おばあさんが、うぐいすが、こなくなつてから、かなしがつていることが。

おばあさん ひかる いったんこなくなつたうぐいすは、きつと、なかなかやつてきませんよ。

だよ。もう春が来たつていうの
に、いつたいどこに居るんだろ
うねえ。

おばあさんは立ちあがつて、外を
ながめる。

おばあ
さん

うぐいすをよんでみようかね。

ひかる だめですよ、おばあさん、立っ

たりしちや。さ、ねましようね。

しょうじをしめて、おばあさんは、

またねどこにはいる。ひかるは、

つくえに向かつて、本を読む。速

くで、牛の鳴き声。ひかる、あく

びをする。また本を読み続ける。

おばあ
さん

ひかる。外で遊んでいてもいい
んだよ。おばあさんは、ひとりで
もたいくつなんかしないからね。

ひかる そう。じゃ、少し遊んできます

よ。用があつたらよんでね。

おばあ
さん

ああ。いいよ。

ひかる、外へ出る。

ひかる なんだか、走ってみたくなくなったな。

ひかる、あたりをかげまわる。そ

れから、立ちどまって、山に向か

って大きな声で、

ひかる おうい、おうい。だれか返事を

しないか。おうい。

おうい——

速くから、こだまのように、おう

い、おういと声がして、それがだ

んだん近寄り、左手から、春吉、

久雄、初次の三人が出てくる。

ひかる 春吉君たちだったの。ぼくの声

を聞いて、やってきたのかい。

春吉 ううん。初めから来る予定で、

そこまで来たら、君の声がした

のさ。

久雄 遊んでもいいんだらう。

ひかる ぼく、留守番なんだよ。ここで

なら、遊んでいいんだよ。

初次 ひかる君と遊ぶのも、あと少し

になったね。

ひかる うん、もうあと四、五日だ。

ひかる、かきねのところにしやがむ。

三人もまた、寄りそつて、しゃがむ。

春吉 ひかる君、ぼくね、おもしろい

ことを発見したんだよ。

ひかる おもしろいことつて。

春吉 ぼくたち四人の名前にね、共通

したものがあるんだよ。

ひかる 共通したものつて。

久雄 ローマ字で、ぼくらの名前を書

くと、その頭文字が、みんなH

なんだよ。

初次 ひかる君の HIKARU の H。

春吉 久雄君の HISAO の H。

久雄 春吉君の HARUKICHI の H。

ひかる そうだ、初次君の HATSUJI の H。

不思議だなあ。

春吉 四人のなかよしが、みんなHな

んだものね。4Hなんだよ。

ひかる 4Hか。いつも先生がおっしゃ

る4Hだなあ。ヘッド(頭)の

「よい頭」、ヘルス(健康)の「強

いからだ」、ハンド(手)の「よく

働く手」、ハート(心)の「清い心」。

このヘッド、ヘルス、ハンド、

ハートのつづりの頭文字が、み

んなHなのと共通しているんだ

なあ。

春吉 ね、ぼくらで4H会を作ろうよ。

久雄 そして、なかよく助け合って、

4Hの精神で、りっぱな人間に

なろうよ。

ひかる 4H会——りっぱな人間——ぼ

くも、そのなかまに入れてくれ

るんだったら、うれしいなあ。

初次 さ、ここでその会を作ろう。

久雄 どんなふうにして作るんだい。

春吉 それも、ぼく、考えたんだ。ぼ

くたち四人がね、かたを組んで

ね、山に向かってね、4Hの精

神を守ることをちかうんだよ。

ひかる それはいい考えだ。よし、やる

う。

四人はかたを組んで、山に向かっ

て大きな声でよぶ。

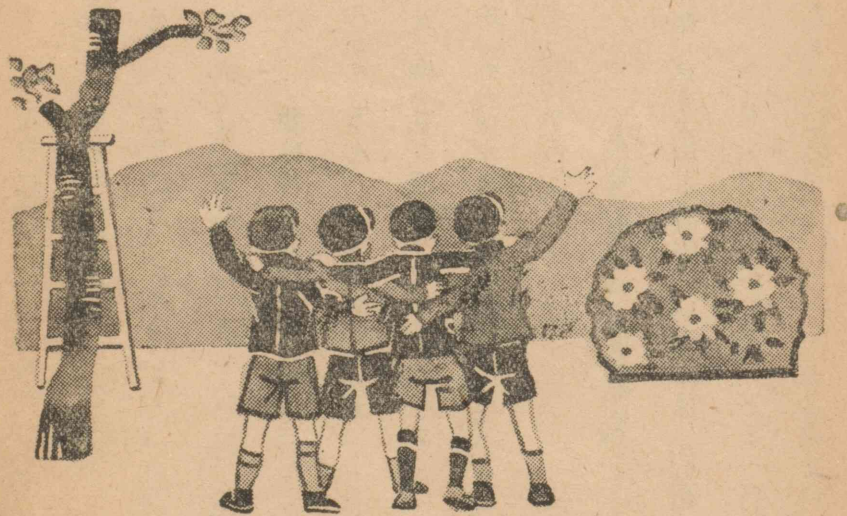
春吉 一つ——清い心——

でみんな 清い心——

久雄 二つ——よい頭——

でみんな よい頭——

初次 三つ——強いからだ——



みんな 強いからだ——

ひかる 四つ——よく働く手——

みんな よく働く手——

春吉 4H会——

みんな 4H会——

初次 ぼくらはりつばな人間になりま
しょう。

ひかる (しょんぼり) ぼく、いつまでも
ここに居たくなつたよ。

春吉 それは、ぼくたちだつて、いつ
までも、いつしよに居たいさ。

でも、ぼくたちの気持が、ぴつ
たり結ばれていさえすれば、ど

ひかる とうげへすぎのなえを植えに行
つたんだよ。

久雄 ひかる君たち、もう、すぐ東京へ
帰るつていうのに、どうして、す

ぎのなえを植えたりするんだい。

ひかる 村のお世話になつたお礼のしる
しなんだよ。朝から、みんなで
出かけているんだよ。

春吉 (何か考えていたが)、みんな、す
もうをよして、すぎのなえを植
えるのを手伝おうよ。

初次 ハンドのよく働く手だ。とうげ
へすぐ行こう。

みんなに遠くにはなれたつて、い
いじゃないか。

久雄 そうだよ。そうだよ。

初次 (ひかるのかたに手をかけてね、

助け合つてやろうね。

ひかる うん。

久雄 さ、すもうでもとろうか。

初次 ヘルスの強いからだだ。よし、
やろう。

久雄、地面に土俵を書く。

春吉 ひかる君のにいさんは、行司が
うまいんだがなあ。どこへ行つ
たの。

久雄 行こう、行こう。みんなで行こ
う。

ひかる でも、ぼく、おばあさんが、か
らだが悪くてねているので——

春吉 いいよ。ぼくたち三人で、ひか
る君の分も働くから。

ひかる だつて——じゃ、おばあさんに
話してみるよ。おばあさんがい
いつて言つたら、すぐあとから
行くからね。

春吉 無理しなくつても、いいんだぜ。

初次 じゃ、走つていこう。

久雄 あとで、また来るよ。

三人は、走って左手へ出ていく。

ひかる、うらやましそうに見送っ

ている。久雄、かけもどつてくる。

久雄 ひかる君、これは、ぼくが作っ

たんだよ。よかつたら東京へ持

つて帰つてね。

ひかる 笛ふえだね。久雄君が作ったの。う

まいなあ。

久雄 うぐいす笛だよ。

ひかる ありがとう、久雄君。ちよつと

ふいてみせてくれないかなあ。

久雄 よし。

久雄、うぐいす笛をふく。

ひかる うまいなあ。ほんとうのうぐい

すのようだよ。

久雄 やさしいよ。ふいてごらん。

ひかる、二、三度、ふいているう

ちに、じょうずになる。

久雄 じゃ、またあとでね。

ひかる どうもありがとう。

久雄、走って左手へ出ていく。

ひかる うぐいす、そつくりだ。

何度も笛をふく。ねどこのおばあ

さん、首を上げて、耳をかたむける。

ひかる そうだ。この笛をおばあさんに

上げて、とうげへ行くことをお

ねだりしよう。そうだ、そうだ。

ひかる、へやの中へかけこむ。

ひかる おばあさん

おばあさん (その声にかぶせて) そうら、ごらん。

ひかる、うぐいすが帰ってきた

じゃないか。

ひかる おばあさん、今のはね――

おばあさん おばあさんが、言った通りだよ。

あんなにかわいがつていたうぐ

いすが、帰つてこないなんてこ

とがあるものかね。

ひかる

おばあさん うぐいすは、どこで鳴いていた

んだい、つばきの木かい。それ
とも、もみじの木かい。

ひかる

おばあさん 何をぼんやりしているの、ひか

るは。

おばあさん、しょうじをあけて外

をのぞく。

おばあさん うぐいすや、帰ってきたのかい。

おばあさんは待つていたんだよ。

ひかる おばあさん、ぼく、見てくるか

ら、ねていらつしゃいよ。あん

まりさわぐと、うぐいすはにげ

ていつてしまいますよ。

おばあさん

そうだね、じゃ、ねて待っていいよかね。ひかるもさわいじゃだめだよ。

ひかる

はい。ぼく、静かにかくれて見えていますよ。

おばあさん、しょうじをしめて、

ねどこの上にすわる。

おばあさん

ああ、うれしいことだ。とうとう帰ってきたよ。

ひかる、庭を歩きまわる。

ひかる

こまったな。おばあさん、笛の音を、ほんとうのうぐいすだと思つて、あんなに喜んでい

だもの。ほんとうのことを言つたら、どんなにがっかりするだろう。それに、春吉君たちには、

とうげへ行くつて約束したし……どうしたらいいんだろう。

おばあさん、じつと耳をすまして

いる。

ひかる

おばあさん、うぐいすの声を待つてるだろうな。よし、もう一度ふいてみよう。

ひかる、笛をふく。そして、

うじをあげて、へやの中をのぞく。

ひかる

また、鳴いたね。

おばあさん

うん、鳴いた鳴いた。ひかる、さわいじゃだめだよ。さ、静かに

しょうじをしめて——

ひかる、しょうじをしめて、外へ

出る。

ひかる

ぼく、どうしよう。おばあさんあんなに喜んでい

るんだもの。ひかる、また笛をふく。

ひかる

ぼく、やつぱり、ほんとうのことと言おう。仕方がないや。

ひかる、しょうじをあげる。

おばあさん

だめだよ、そんなにがたがたさせちゃ。うぐいすが帰つてしま

うじゃないか。早くしょうじをしめて——
ひかる、しょうじをしめて、また外へ出る。庭を歩きまわる。ひかる、木にのぼる。

ひかる

久雄君——春吉君——初次君——ぼく、行けなくなつちやつた——

ひかる、木にのぼったまま、笛をふ

く。笛の音は、静かに流れていく。

おばあさん、うれしそうに耳をか

たむけている。

幕

「行った」, 「歩いた」, 「話した」などの「た」は、ちよつと考へただけでは、形の変らない言葉のように見えますが、あなた方はどう思いますか。

赤ちゃんが歩いた。

上の文の「た」に、「……すれば」という意味の「ば」をつけると、どうなるでしょう。「歩いたば」とは、いいませんね。

赤ちゃんが歩いたらば、(わたしはうれしい。)

赤ちゃんが歩いたり, ないたりします。

赤ちゃんが歩いたらう。

少しむずかしいかも知れませんが、上の「たら」, 「たり」
「たらう」は、「た」の変った形とは考えられませんか。

10 「う」「ます」その他

動作を表わす言葉の後について、そのはたらきを助ける言葉は、「た」のほかにも、まだ、いくつかあります。

ぼくは歩こう。

わたしは話そう。

などの「う」も、そうです。

ぼくは歩きます。

わたしは話します。

などの「ます」も、そうです。

ぼくは歩きたい。

赤ちゃんは歩きたがる。

わたしは話したい。

赤ちゃんは話したがる。

ぼくは歩くまい。

ぼくは勉強しよう。

わたしは話すまい。

赤ちゃんを歩かせよう。

などの、「たい」, 「まい」, 「たがる」, 「よう」なども、そうです。

こういう言葉は、それぞれどういうはたらきをしているか、みんなで考えてみましょう。

また、使い方によって、形が変わるか変らないか、それも考えてみましょう。

ム」について、調べてみましょう。

上の文の中で、「初めて」も形が変わらない言葉です。ところが、これは何かの名前でもないし、「が」「の」などともようすがちがっていますね。

初めて、ももやしきへ行った。

ようやく、ももやしきへ行った。

どんどん、ももやしきへ行った。

上の三つの文を見ると、「初めて」、「ようやく」、「どんどん」などによって、ももやしきへ行ったようすが、いろいろに変わってきます。このように、動作を表わす言葉を、もつとようすがよくわかるようにするはたらきを持った言葉も、形が変わらないのです。

ぼくは、のろのろ歩いた。

わたしは、ゆっくり話した。

上の、「のろのろ」、「ゆっくり」のかわりに、意味が反対になるような言葉を入れかえてみましょう。

また、ほかの言葉を入れかえて、歩き方や、話し方のようすを変えて言ってみましょう。

さて、初めの文をもう一度考えてみると、

形の変る言葉 行(た)

これは、動作を表わす言葉で、行かない、行きます、行く、行けば、行こう、というように変わりますね。

形の変らない言葉 (1) 上原ひろし みんな
南ただし ももやしき
(2) が と の へ
(3) 初めて

となりますね。それでは、「行った」の「た」は、形が変わるでしょうか。変らないでしょうか。

9 「た」

「た」は、「が」、「の」、「と」、「へ」などと同じように、これ一つでは使いようがありません。けれども、文の中に使われて、

ぼくは歩いた。

わたしは話した。

などのように、動作を表わす言葉の後につけて使われると、はたらきが出てくるのです。

いろいろな動作を表わす言葉に、「た」をつけてみましょう。「た」をつけると、どういう意味が出てきますか。

感じたままを、すなおにうたうのが、いちばんいいのです。
次に、りんご園の短歌を、少しあげてみましょう。

一月の空あたたかく晴れわたり雪のかがやく遠い山
山
まっ白いりんごの花の中に立ちわたしは聞いている
みんなの声を
ふくろかけ終えて帰れば夕方のきは静かに行手に
ただよう

みんなの作った短歌を、クラスで発表して、話し合いを
しましょう。

その短歌を集めて、「学級歌集」を作りましょう。名前は
なんとつけますか。

8 形の変らない言葉

「問題6」では、使う場合によって形の変る言葉について
考えてみました。今度は、いつでも形の変らない言葉につ
いて考えてみましょう。

上原ひろしが、みんなと、初めて、南ただしのももや

しきの家へ行った。

上の文で、形の変る言葉はどれでしょう。また、形の変
らない言葉はどれでしょう。

「上原ひろし」はどうでしょう。「が」はどうでしょう。

「みんな」はどうでしょう。「と」はどうでしょう。

「上原ひろし」、「南ただし」などは、人の名前です。これ
は、「ひろさ」となったり、「ひろす」となったりすること
はありませんね。人の名前は、形が変らないのです。また、
「ももやしき」は家の名前ですが、これも形は変わりません。
「つくえ」はどうですか。「こしかけ」はどうですか。
「いぬ」、「ねこ」はどうでしょう。

人や、物などの名前は、形が変わりませんが、「上原ひろし
が」の「が」も、形が変わりませんね。「みんなと」の「と」
「南ただしの」の「の」、「ももやしきの家へ」の「の」と
「へ」なども、形の変らない言葉です。

「が」、「と」、「の」、「へ」などは、それ一つだけでは、意
味がないし、使いようのない言葉です。他の言葉につき、
文の中へ使われて、初めてはたらきの出てくる言葉です。
ほかにも、こういう言葉があるでしょうか。「村のアルバ

「く」の部分が、「か」、「き」、「け」と変ることがわかります。「話す」は、やはり「す」の部分が、「さ」、「し」、「せ」と変ります。

それでは、「歩く」の「く」の部分が、「こ」となることがあるのでしょうか。

「話す」の「す」の部分が、「そ」となることがあるのでしょうか。

どういう言葉が後に来たときに、「歩こ○」「話そ○」となるのでしょうか。

「ぼくは歩かない。」という文と、「ぼくは歩けない。」という文とは、どちらがいますか。

「わたしは話さない。」という文と「わたしは話せない。」という文とは、どちらがいますか。

「歩く」、「話す」は、動作を表わす言葉です。動作を表わす言葉は、このように形が変わります。「りんご病院」について、こういう言葉を調べてみましょう。

形が変わる言葉は、動作を表わす言葉のほかにもありますね。五年上「かしの木広場」の「問題1」にあった、色や、

形や、性質や、感じなどを表わす言葉もその一つです。

「りんご病院」について、もう一度、こういう言葉についても調べてみましょう。

7 短歌（和歌）

「5りんご園の日記と冬の歌」の中に、子どもの歌とおとなの歌がのっています。

あなた方は、こういう形の歌を、今まで見たことがありますか。「百人一首」のカルタを取ったことのある人は、知っていますね。こういう形の歌は、短歌ともよばれ、和歌ともよばれています。短歌は、ほかの詩とはちがって、きまった形を持っていますね。

その、きまった形というのは、どういうことでしょうか。

短歌には、特別の調子があります。この特別の調子は、どうして生れてくるのか、みんなで考えてみましょう。

短歌が、五音と七音の組み合わせで、五、七、五、七、七というようにできているからといって、短歌を作る人が、そのことにばかりこだわっていたのでは、決して、いい短歌を作ることができないでしょう。見たまま、思ったまま、

4 た と え

きつねにつままれたようです。

みんなは、もう湯につかったような気持になるのです。
た。

これは、「青ざり温泉」の中の文の一部分です。「ようです」とか、「ように」とかいう言葉を使って、何かにたとえているところは、このほかにもありますね。それをさがし出してみましよう。

そして、それが、文の中でどういうはたらきをしているかを考えてみましよう。

5 す じ 書 き

「平和工場」の中に、パスツールのことを書いたところがあります。これは、映画の中の大切な部分を、伝記ふうに短く書いたものです。

映画を見たら、そのすじ書きを書いてみましよう。

また、大切なところだけを取り上げて、文を作ってみましよう。

6 形の変る言葉

木田先生は、歩くときも、話すときも、いつも静かだった。

「12りんご病院」の初めの方に、こういう文があります。「歩く」、「話す」という言葉について、次のことを考えてみましょう。

「歩く」、「話す」の後に、「ない」という言葉をつけるとどうなりますか。「歩くない」、「話すない」とはいいませんね。

「歩く」、「話す」の後に、「ます」という言葉をつけると、どうなりますか。「歩くます」、「話すます」などというとおかしいですね。

今度は、「……すれば」という意味の「ば」という言葉をつけてみましよう。「歩くば」、「話すば」などという人はいないでしょうね。

「歩く」という言葉は、「歩(ある)」の部分は変らないで、

16 問題

1 名前と説明

上原ひろし君のアルバムの写真には、「青ざり温泉」「平和工場」「りんご病院」などというように、名前がつけてあります。あなた方の写真にはどうですか。きっと、そういう名前や、説明がついていることでしょう。名前や、説明は、よくわかるということが第一ですが、生き生きした感じが現われているということも、大切です。

五年上の「かしの木広場」のさし絵に、名前や、説明をつけてみましょう。

そして、できたものを、みんなでくらべて、話し合ってみましょう。

てんらん会などに出す、もけいや、成績品などにつける説明も、よく考えてつけましょう。説明書の大きさや、ていさいなども、自分でくふうしましょう。

2 音のよびかけ

「1 ぼくのアルバム」の中の「町の音」という詩には、じつ

(8)

さいの音は表わされていません。学校や、郵便局や、病院や、停車場では、どんな音がしているのでしょうか。また、工場や、お店などには、いろいろ種類がありますが、それぞれ、どんな音がしているのでしょうか。みんなで、それを言葉に表わしてみましよう。

こういう「よびかけ」(シュプレヒ・コール)をやってみたらどうでしょう。題を停車場ときめたら、めいめいのグループが、人声や、物音を受け持って、やるのです。うまくいけば、きっとゆかいですよ。

3 唱歌とろう読

「青ざり温泉」の中に、子どもたちが、「土手のすかんぼ」の歌をうたうところがあります。唱歌をうたうときには、きまった節の通りにうたわなければなりません。けれども、「土手のすかんぼ」の歌でも、ろう読するときはそうではありませんね。ろう読するときには、どういうことに気をつけたらいいのでしょうか。

「町のアルバム」の詩や、「青ざり温泉」のろう読をして、みんなで研究してみましよう。

(9)

めしあがって	ゆずられた(ゆずる)・88	らくらく……………39
(めしあがる)……………61	ゆぶね……………12	ラジウム……………11
メダル……………45	ゆみず……………22	ラシャ……………6
	ゆらぐ……………76	
もくぞう……………32		りょうほう……………30
ものおと……………6	よけい……………68	りんごえん……………61
もみじ……………111	よこがお……………28	
もゆる(もゆ)……………77	よぞら……………18	れつ……………32
もよう……………24	よてい……………105	
	よりかかって	ろうか……………12
やけあと……………13	(よりかかる)……………46	
やなみ……………25	よんひゃくかん(かん)75	わか……………(13)
やまのて……………30		わかわかしい……………65
	らいひんしつ……………47	わけいり(わけいる)……………77
ゆくて……………(14)	ラウドスピーカー……………39	わるだくみ……………41

新 し い 字

覚 (5)	局 (6)	院 (6)	豊 (7)	居 (9)
照 (11)	漁 (15)	賛 (16)	貸 (16)	余 (16)
貝 (20)	昨 (21)	応 (31)	続 (32)	造 (32)
勤 (34)	展 (34)	過 (34)	勸 (36)	故 (36)
納 (37)	画 (37)	講 (39)	定 (39)	曲 (39)
毒 (40)	殺 (40)	察 (40)	救 (42)	因 (43)
罪 (45)	認 (45)	期 (46)	修 (46)	諸 (46)
構 (48)	志 (49)	訳 (51)	眼 (53)	護 (54)
潔 (55)	採 (55)	退 (55)	届 (57)	節 (58)
収 (60)	句 (61)	希 (63)	謝 (66)	耕 (69)
素 (70)	象 (71)	液 (71)	績 (72)	際 (80)
練 (80)	協 (81)	預 (83)	弁 (83)	予 (84)
製 (86)	登 (90)	承 (92)	確 (94)	比 (95)
悲 (96)	柱 (100)	情 (101)	留 (105)	行司 (108)

ちまた……………77
 ちょうきよほう……………84
 ちよがみ……………77
 ちらばって(ちらばる)87
 つうふう……………55
 つかって(つかる)……………16
 つづり……………106
 つとめて(つとめる)……………34
 つばき……………42
 つぶぞろい……………60
 つままれた
 (つままれる)……………20
 つみ……………45
 つるつる……………48
 ていいん……………39
 ていしゃば……………6
 てかてか……………86
 でき……………60
 てさげぶくろ……………57
 でし……………42
 てせい……………86
 であらめ……………58
 てぶくろ……………77
 てりはえ……………11
 テレビジョン……………37
 でんき……………(10)
 でんせんびょう……………41
 てんらんかい……………34
 ときめいて(ときめく)……………7
 どく……………42
 とくちょう……………55
 ところてん……………24
 としおいた(おいる)……………46
 トタン……………18
 とでん……………27
 とどまって(とどまる)41
 とびいろ……………86
 とびつく……………19
 どひょう……………108
 トランク……………19
 とりまいて(とりまく)13
 とんがった(とがる)……………4
 ないぶ……………55
 なえ……………101
 ながしば……………22
 なっとく……………37
 なまり……………75
 なみき……………6
 なみだぐんで
 (なみだぐむ)……………21
 なやみ……………40
 なやんだ(なやむ)……………44
 にあって(にあう)……………54
 にたんぶ(たんぶ)……………60
 になつて(になう)……………52
 にまん(まん)……………60
 にわさき……………100
 ね……………113
 ねこむ……………101
 ねつとう……………40
 ねつびょう……………40
 ねばらない(ねばる)……………70
 のきした……………100
 ハート……………106
 はおと……………65
 バザー……………57
 はじき(はじく)……………77
 はしらどけい……………100
 バスツール……………37
 はっぴょう……………(14)

はなぞの……………24
 はなやか……………9
 はま……………22
 はめこんで(はめこむ)24
 はみだし(はみだす)……………34
 はらがけ……………5
 はりふだ……………29
 ハンティング……………19
 ハンド……………106
 ひかえしつ……………31
 ひっこして(ひっこす)27
 びったり……………108
 ひとごえ……………(9)
 ひとしお……………14
 ひとりっこ……………37
 ひので……………77
 ひまわり……………32
 ひゃくにんいっしゅ(13)
 びょういん……………6
 ひょうめん……………89
 ひろいよみ……………21
 びんびん……………43
 ふうわり(ふわり)……………101
 ふえ……………110
 ふくまれて(ふくむ)……………42
 ふこう……………42
 ふさばな……………11
 ふじん……………54
 ふぞろい……………34
 ふたい……………100
 ふっくら……………89
 プラットホーム……………30
 ふるえて(ふるえる)……………22
 へいほうメートル……………60
 べつじょう……………43
 ヘッド……………106
 べつとり……………67
 ヘルス……………106
 ほおえむ……………72
 ほしづきよ……………18
 ほどこし(ほどこす)……………44
 ほとんど……………45
 ほのぼの……………65
 ほりつけて
 (ほりつける)……………11
 ホルダーえき……………71
 ほんしゃ……………36
 ほんの……………41
 ぼんやり……………18
 ましかく……………39
 まちゆ……………12
 まつかさ……………77
 まるみ……………39
 まんぞく……………64
 みおろせる
 (みおろす)……………39
 みがる……………84
 みぎて……………38
 みしらぬ(みしる)……………65
 みすみす……………44
 みらのべ(へ)……………77
 みつまめ……………24
 みなり……………96
 みょうな……………15
 むくいられる
 (むくいる)……………45
 むすばれて
 (むすぶ)……………108
 めくれば(めくる)……………6
 めぐんで(めぐむ)……………69

かしゅう(14) きちがい 42 けんいん 43
 かしらもじ 105 きつね 20
 かすめる 83 きばい 71 こうぎょく 68
 かたき 49 キューリー 54 こうみょう 66
 かなしんだり きょうけん 42 コーチ 49
 (かなしむ) 96 きょうじ 108 ゴールデン
 かぶ 82 きょうすいびょう 42 デリシャス 74
 かぶって(かぶる) 19 きょうゆうち 60 こくてつ 27
 かぶりつく 72 きょうわこく 46 こくりつ 53
 かやくさ 77 きょく 39 ここち 77
 がらがら 28 こしょう 36
 カラン 13 くぎ 15 コスモス 5
 かれくさ 76 くず 87 こっこう 74
 がんか 53 くらわけて 31 ぶさた(ぶさた) 31
 かんがえこんだ (くっつける) 28 こやし 69
 (かんがえこむ) 17 くて(くる) 27 こわして(こわす) 6
 かんけき 59 ぐっと 30 こんで(こむ) 27
 がんこ 51 ぐらついて(ぐらつく) 43 さいこう 55
 かんぜん 41 クリームいろ 55 サイレン 8
 かんばしい 65 グループ (9) くんたん 75 さぎょうじょう 33
 きがい 52 さしえ (8) ざせき 39
 ぎくり 19 けいこ 101 さびた(さびる) 13
 きざみこまれて けが 38 さめます(さめる) 21
 (きざみこむ) 95 けだかい 65 さやけく 24
 ぎし 50 けっしん 15

ざらざら 20 しょうどく 40 せいせき 72
 さら 6 しょうむいん 31 せいせきひん (8)
 さんそん 100 しょくん 46 せいようが 55
 しらくも 25 せっかち 86
 しい 31 ずあし 70 ぞうはなむし 71
 しおらしさ 73 すかんぼ 12 そえて(そえる) 95
 じき 46 すき 42 そそいで(そそぐ) 26
 じくばり 34 すぎ 101 ソルボンヌだいがく 45
 しずまりかえった (しずまりかえる) 90 スキーぼう 68
 したしく(したしい) 77 ずきん 68 たいいん 55
 してつ 27 ずさまじい 90 だいがく 31
 しとけました すじがき (10) たいひ 75
 (しとける) 98 すしや(すし) 18 たきび 77
 しみ 54 すっきり 11 たすけあって
 しみとあって スック 70 (たすけあう) 108
 (しみとおる) 65 すっぱい 58 たちまち 13
 しゃたい 36 ステージ 39 たてふだ 15
 シャツ 71 すなわち 40 だどたどしかった
 ジャワざらさ 12 ずばぬけて (たどたどしい) 35
 しょうかく 72 (ずばぬける) 38 ためた(ためる) 59
 しゅぎょう 46 すみ 15 たんか (13)
 しゅうりょう 60 すみついて(すみつく) 102 たんじょうび 45
 じゅくする 68 せ 76 ちぢこまって
 しゅっちょう 54 せいけつ 55 (ちぢこまる) 83
 シュプレヒ・コール (9)

国語編修委員会

島津久 基治郎
坪田讓 太郎
松尾弥 太
竹内良 助子
本間平 安

(本社)

井上 赴馬
高藤武 人
服部直 人

挿絵及装釘

白崎海 紀

感謝
「青ざり温泉」は、二反長半氏の作品、「おとなの作つた歌」は、木下利玄、尾上柴舟、古泉千樞、前田夕暮の諸氏の作品であります。本書に採用するにつき、快い御同意を得深く感謝いたします。なお、「りんご園の日記」中の詩は、左部千馬氏の作品であります。

Approved by Ministry of Education (Date Dec. 15, 1949)

太郎花子国語の本
町のアルバム 小学校5年用下

昭和25年5月20日印刷
昭和25年6月25日発行
(昭和24年10月16日 文部省検定済)

小国 514

著者 日本書籍国語編修委員会
代表者 井上 赴
発行者 日本書籍株式会社
代表者 木村淵之助
東京都文京区久堅町108番地
印刷者 日本書籍株式会社
代表者 木村淵之助
東京都文京区久堅町108番地

発行所 東京都文京区久堅町108番地 日本書籍株式会社

¥ 24.90

新しい言葉

()の中の数字は
問題のページです

あまい(あまい).....58	いなみ.....8	おい(おう).....73
あざり.....10	いのちとり.....42	おいごえ.....71
あおにさい.....36	いぶいて(いぶく).....24	おうえん.....31
あかぎれ.....54	いまさら.....17	おおかじ(かじ).....13
あかるみ.....65	いわい.....72	おかわれた
あきぐさ.....9	いんちょう.....62	(おかわれる).....90
あきめいて(あきめく)74	インド.....74	おかさず(おかす).....45
あきやく.....93	ヴァイオリン.....39	おこし(こす).....47
あきらめた	うけもって	おこなわれて
(あきらめる).....50	(うけもつ).....(9)	(おこなう).....97
あくび.....104	うしお.....7	おしば.....95
あこがれて	うっとり.....70	おせじ.....97
(あこがれる).....22	うばった(うばう).....40	おって(おる).....87
あざやか.....25	うまれこきょう	おとずれた
あじ.....72	(こきょう).....102	(おとずれる).....23
あした.....77	うみべ.....15	おねだり.....110
あたたまる.....54	うりあけ.....57	おもかけ.....40
あたふた.....23	うんてん.....29	およびだし
あつい.....55	うんてんしゅ.....27	(よびだし).....47
あまねく.....90	あみひき.....15	オルガン.....12
あゆみ.....77	え.....89	かいどう.....77
アンテナ.....33	エイチ.....105	がいろ.....77
	えんとつ.....10	がっかい.....45
いしばい.....71		かけえ.....18

(1)

町のアルバム

(5年下)

35000 / 589690
925
646900
600
469000
450000
190000
0.786

NIPPON SHOSEKI